

郎路生麻。幹主

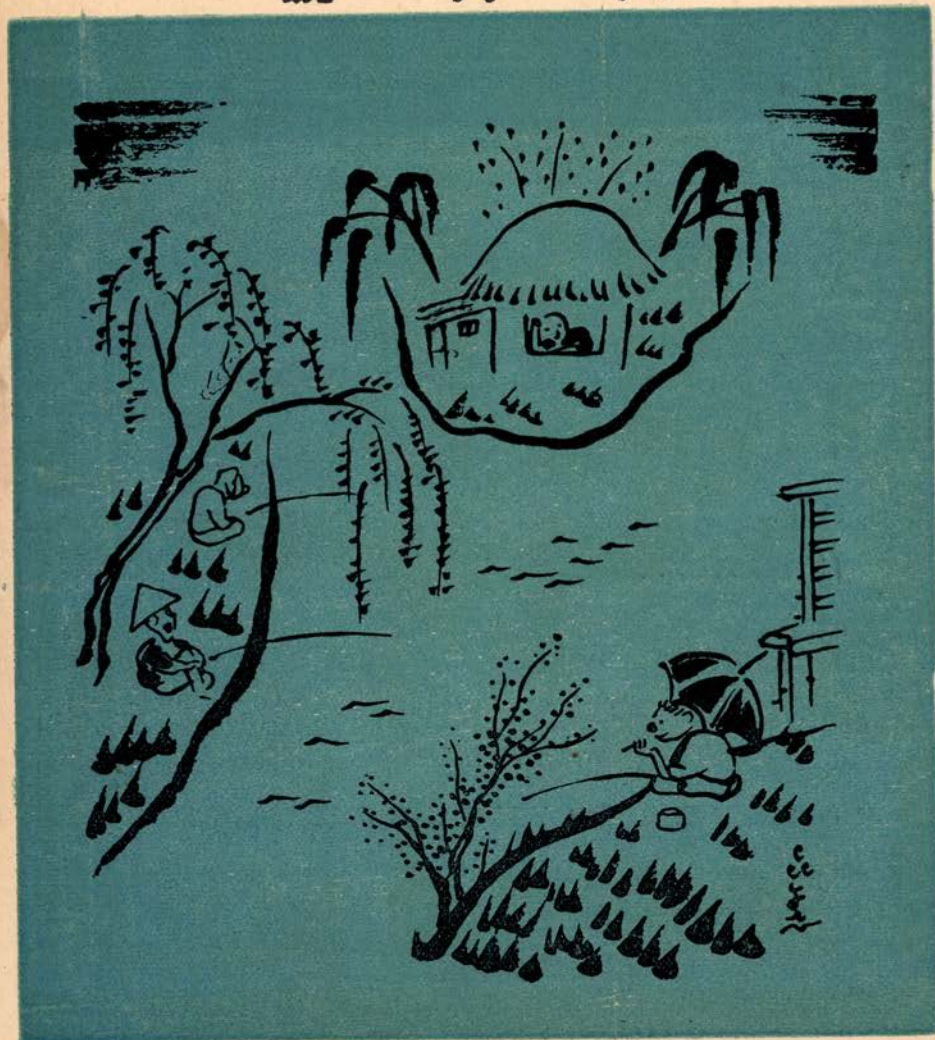
川柳新誌

號 月 六

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和二年六月一日發行每月一日發行

川柳雜誌 第四卷第六號

川柳雜誌社發行



六厘坊忌

◇日時 六月六日午後七時
◇場所 大阪市南區清水町停留場
西八北側 端の坊

◇兼題 「丁稚」 三句
◇會費 二十錢

本社六月例会

◇日時 六月十八日午後七時

◇場所 大阪市南區清水町停留所
西八北側 端の坊

◇兼題 「廊下」 三句
◇會費 貳拾錢

本社の移轉

本社は来る六月八日に移轉することになつて居ります。同日以後の御通信は左記移轉先へ願ひます。

大阪市西成區千本通五丁目七番地
(南海線岸の里下車西北五丁)

川柳雜誌社
但し事務所は従前通りです。

暑中見舞の

廣告を募る

川柳家の交誼を一層深めるために暑中見舞の廣告をお出し下さい。

一口金五拾錢 幾口でも申込で下さい
一頁希望の方に限り金五圓一口分の原稿は名刺がはりに願ひます。廣告料は前金の事。申込期限七月十日限(八月號)

川柳雜誌 第四卷第六號目次

感想・評論

人間詩

借家を探しつゝ

病床獨斷語

生活近片

近事片々

研究・其他

柳櫓 二十四篇まで
評釋

生業の古川柳

東京支部柳話會

川柳 累卵の遊び

漫畫

川柳と聯珠

初對面的情景

募集

雨戸

燒香

留學

本社五月例会

各地柳壇

川柳書架

魚釣(表紙繪)

題字

編輯後記

川柳塔

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

作

吉田 清
小出 重
松 生

石賀 馬行

西本 三笑

喜田 飯山

横田 眠聲

岩崎 柳路

庄萬 よし

酒井 駒人

奈良 井仙坊

高橋 かほる

松本 助六

太田 朝陽

檜山 千代二

塚崎 松郎

橋本 二柳子

安川 久流美

中野 柳陽

諸家



近作柳樽

路郎

選

三ほくさ齒をぬきにゆく子をつれて
 挨拶で見ても眼から鼻へぬけ
 何故もつさ妻艶つほくつくらはぬ
 もう買つて貰ふ氣でるるいぢらしさ
 中腹にはにかむ色の桃畑
 お父さんに見せるさ云つて寢ましたよ
 よその子を泣かせば叱らねばならず
 大道で賣れば埃の味氣なく
 貧乏が他人のやうにさせもすれ
 熱湯を吹き吹き眞理見失ひ
 一人居の親しむは日記帳ばかり
 泣かすにはをられぬ秋の便なり
 眞直に地を割る水の力なり
 灯の下に寢られぬ人が多すぎ
 床の中思想ぐるりさ一廻り
 金屏風あの頃の値を思出し
 運強う生れ一軒焼け残り
 運のある事を易者は念を押し
 橋向う三階建に灯がごもり

大 阪

北 海 道

大 阪

山 雨 樓

夢 二 郎

秋 晴



電燈を消す時脇毛ちらさ見え
裏梯子念を押されて怖うなり
鐵びんの湯氣に思案がまごまらず
弱くなつたさ書添へた手紙なり
JOBKお妾のもう家にゐるす
たゝいてる手は可愛さにきつうなり
幸福のうしろで金の笑ひたり
うなづいて紙幣を数へる日もありて
鼠取仲間怖い死を見せる
赤貧を知らず喜ぶ新學期
握飯しつかり脊でつぶされる
接吻を子供さつかでおほて來
くさらない店で主人は社に勤め
よい縁さ知れさ娘は手はなせず
面目一新家主のかこひだけのこり
草かごをのがれんだだけの青蛙
公設へ一緒に國の母も行く
相方の電話主さかはるなり
まゝごこの馬力が着いてのかされる
聊かの恨みを藝者捨てぬなり
儲けすぎはせぬかきつひに恐うなり
足並が揃ひ素通してしまひ
言譯に咳が出るので嘘にされ
不意の引越へ近所の口がすぎ

山 同 同 同 松 同 同 同 同 大 同 同 同 同 神 同 同 同 同 同 同 同 同
梨 江 阪 戸

天 同 同 同 穗 同 同 同 同 舟 同 同 同 同 同 同 一 同 同 同 同 同 同 同 同
花 波 々 笑 美



張切つた乳房を抱いて廣く寢る冬の原たゞ川だけが生きてゐる奉加帳お顔にかゝります云ひ本堂の大きな人が一人立ち犯人の眼にも櫻の華やかさ辻占を買つて氣賺が又直り赤貧にたゞ寢て見たい日の多したんほゝを園丁荒く抜いて捨て振袖を少しぬらした金魚鉢思惑があつたら云へご男親古本屋まうけた事は云はぬなり常識を少し外して春の宵金持は下駄の音さへ落ついて執念をまごもに受けた恐しさもう一ご手横からちゑを貸してやり母一人の残す都の淋しすぎ貧しさが子供に知れる時が来た好かれてる方に遠慮がありません宣傳の仕方もあるに東西屋ほつくりご椿に似たり近所の娘孝行の手先に炙はつぶされる蜘蛛の巣をかぶつて走るかくれんぼ洗濯の日和豆腐屋呼びそこね立話つひに女房も引合せ

同同島同同同同同同同同同同同同同同同同大同同同餐同同同同

三

根

阪

池

同同櫻同同同毒同同同翠同同同其同同同桃同同同同

坊

仙

峰

象

裁



別莊におちついて鳴くぎいすなり
病んでより人に親しむ子さなりし
婦女界さ布巾の膳を立つて視る
飽かれたる鳥が喧嘩をきゝあきる
妻さ出てエレベーターへ乗つただけ
煽風器三味弾く妓には届きかね
取るものもないにたんすへ錠をかけ
薄つべらな夜具へ小生起直り
川岸へ棹の揃うたうらゝかさ
私生兒さ知らず丸々太るなり
この橋を渡れば湯屋も島の内
買物を待つ子は椅子へ浅くかけ
看護婦も春の女になつて出る
下宿屋の時計きちんさ午砲に鳴り
留學のさもあらぬ趣味覺て來
雲雀鳴く下に新築急いでる
葉柳の下の家鴨へせまる夏
嬌笑をさつこ氷らすドアがあき
おしやべりのくせに話の下手なこ
うるさゝに妻に壓倒されておき
母親の手紙は歸期待つばかり
留學に氣晴しさいふ物が要り
留學は咲いた櫻を葉書で見
良心を新聞電車から感じ

大 同 同 神 同 同 廣 同 同 靜 同 同 大 同 同 松 同 同 御 同 同 堺
阪 戸 島 岡 阪 江 影

大 夢 子 志 同 同 露 同 同 同 同 雅 同 同 白 同 同 同 同 町 同 同 柳 同 同 春 同 同
郎 斗 芳 蝶 二 秀 三



戸のあけたてを見られるも嫁
 おい君さいはれて見れば「帯長し
 瀧を浴びる姿正氣さ思はれず
 世辭にしても嬉しい彼の言葉なり
 湯加減につい淨るりさなりにけり
 停電に明日の試験を馬鹿にされ
 廢坑へ驚だけが啼きに來た
 岡惚をさしたるだけで亡ぶのか
 その春を赤いたすきに知らせて居
 算盤をさかさにすれば子があそび
 僕さいひ君さいひまだ職がなし
 一張羅母が見立て、姉がぬひ
 我事のやうに辯護士脱線し
 編笠の身もうつかり見上げた
 愛の巢へ石でも投げて見たうなり
 勝訴こそしたがもこく借つた家
 背廣から京の言葉をだるうき
 親さ子ミ肩を並べてまだましだ
 貧乏の子は秀吉をなつかしみ
 散髪屋子供にむいた世辭も云ひ
 社交界花形同士まだ若し
 歩金をば取らしておいて王手飛車
 苦學した父の若さを辭書に見る
 停電に女中の飯は未だすまず

神 同 大 同 兵 同 大 同 京 同 同 石 同 同 神 同 德 同 福 同 同 河 同 同
 戸 阪 阪 都 川 戸 島 岡 内

二 同 喜 同 千 同 三 同 京 同 同 雪 同 同 嶺 同 銀 同 無 同 同 與 同 同
 南 留 鳥 日 郎 洞 月 柳 限 詩 夫



人

間詩

蛭子省 二

◆川柳はタツタ十七字を中心とした詩であるから、表現の巧拙に因つては、自己が得んとする藝術境に容易に没入し能はざる事があり、常に物足りなさを覺へ遂には放漫粗野に陥つて、まゝに觀察する事から、遠ざかり勝ちに、觀念詩に墮し、僅かに形式づけを備へた句が出来上ることがある、由來詩人は成るものに非ず、生るものなりと大天才の謳歌される所以である。

其の一面川柳には川柳獨特の表現法の尊い理由も生じてくる。近頃の作がごつとも生硬であるのは、此の表現の雅拙、推敲の不足、苦心のおろそかにされて居る外に、十七字中心に云ふ事を忘れて、哲學的な深遠な思想をねらひ、科學的事件を叙述し、或は複雑な三面記事的葛藤を取扱はむとする結果句面が徒らに紛擾して、一節二節のつながりがなかつたり、二節三節が何等關係を持たなかつたり、單に形式を備へた表現の滅裂な

る羅列に過ぎぬものがあつて、作者の態度が窺へない、贅彼我の錯雜味を謎にする思想と言葉の遊戲であつて、古狂句に代る新狂句を見做すべきである。

◆川柳の穿ちは一つの特質であるけれども、小さい穿ちのヤマを悦ぶ作家が目立つて墮へ、純な究極の感でなく、一寸聴こえよがしのオツな刺戟を與へて、ノホホンとさめる惡技巧が行はれる、一つは短詩の單純化を知らず、他は單純化の焦點をそらした災ひから生ずるので、川柳は雜草が這ふ如く、平面に擴く描寫し得る詩でない、横に纏めるには餘りに短なる詩型である圓の一つの中心點、核心に全精力を傾注して、永劫不變の力を置くにある。

◆川柳は人生詩であるから、どんな句一天才の作品でも、他を感動させ得ないなら、活潑な生命の詩は申されぬ、川柳

詩に依り社會人生にうるほひが生れなくてはならぬ、即ち一人のみにて完成し得るものではない、だから表現苦の惱みが附随する、詞には表面丈けの意味も、詞の周圍に放つ光彩からの陰影濃淡の情趣を抱握して、共通を豊富に深刻にせねばならぬ、内生活の熱く愛さば、詞のもつ創造の廣く深きであり「言葉」さは詞の神性である、一語の意味はそんなに單簡に限定されるものでなく、學問上のテクニクならばいさ知らず、十人が十人百人が百人、同じ感激を得るの難事なるは、各自の感受性の相異で、詞の靈妙な活動で、夫れは詞の音樂性とも言へる、
◆詩は此の音樂性の交響した波動の傳心するもの、智的理解にては皮相な表象を窺ふのみで、血液の鼓動は計り得ない、移動性に富める詞は、直覺直觀に因つてのみ透徹し、從つて詩は何人にもわかる新聞記事のドライな言葉ではなく、川柳詩人の培ふ萌芽の成長の樂しみである、川柳詩には音譜がないから、直線的に默讀しても支障はないけれど、五七五調なれば、さうしても五三七、七五で一呼吸の高低動止が伴ふ、尙ほ五は五七は七二胎めるトーンがあつて、例へば

高尾(三)以後(二)小判で(四)面を(三)はりて(三)なし(二)

舌頭に轉ぜらるべく、殊に中七は、面を(三)小判で(四)置き替へても智的の意味には、大差はないけれど、音樂的には中七の響の差が上下に波及する點も考慮せねばならぬ、樂器に合せるならば必ず微妙な變化が人心に傳はるであらう。

◆鈴木鼓村翁が薄田泣菫氏の詩を作曲される度に、其一語も無駄がなく、悉くが音樂である事、他の詩人の到底企及し得ず激賞されしが、泣菫詩集一冊が生きた音譜でありさせば

洵に究極に達した尊いもので、川柳詩人も爰までの希望が欲しいのである。因に多作寡作の問題も解決され、一分時に二句作り一題百數十吟を何分にまゐめたなどの、柳界のレコード、ホルダーはマラソン競争場裡に屬すべき事で、詩は質のものである、自己の陶醉の度合に於てさへ、一日三四句を連續に得るは易からざる業、刻苦して寡く發表する作者に敬意を表し度い、默の維摩は絕對詩人と言へよう、はちきれそうな打てば鳴る音樂的な詩性全體であるからだ。

◆品子女史の歌集「流星の道」を讀むと卷末に「詩歌の本質は特に自分一人に終始してゐる藝術であると思つてゐます(中略)自己表現の満足一丁度幼い子供が自然の調子のある聲で勝手なことを歌つて自ら満足してゐる心もちが詩人の製作の心持です(中略)即ち詩や歌は自問自答の藝術です」私共の川柳境地は聊か隔りがある、川柳は人口二百五十萬の大都市でも二三萬の町村でも左右前後に緊密なる對他關係を有しつゝ、内生活の眞實なる人生創造に精進するもので、自問自答だけでは足りない、體驗の鞭撻激勵の下に愈々自己が擴張され、衆即ち對他關係も一枚になる三昧境に生れる滋潤味ある人間臭い詩なのである、山奥にもつてたやすく捻弄する詩ではない、尤も殊更に現代に觸れねばならぬものではない事は當然である、實稀薄な空氣の天地には人間が遂に生存し得ず、熱愛熱美のない天地には生命があり得ない、川柳家は充實した生命を保護しつゝ活動的生存を讃禮する人間らしい人間その者で、川柳は人間らしい人間詩の現はれである。

本社五月例會

五月九日夜
於端の坊

松耶、紋太、秋晴、卜柳、一路、山雨樓、源坊、突支坊、耕三、葉平、鮎美、悟耶、流星、加香、白帆、柳々、彩秋、佳山、醉夢、茂幸、炭車、助六、飯山、萬よし、雅幽、英豆、舟々、毒仙、翠峯、京耶、ひろし、二柳子（來會名簿より）

友達（兼題） 松 耶 選

友達が来て新妻を笑はせる 九柳
友達の友達が来てかしまり 白帆
友達へ軽い返事で立つ俤 突支坊
友達を會計に頼む 鮎美
友達が来て生酔の強くなり 新水
友達のオーバを借りて寫して來 雅幽
友達のこゝで心配 二柳子
新妻のお茶に友達堅うなり 源坊
大丸へ來るご友達またふへる 山雨樓
注意まで添けて友達貸してくれ 萬よし
友達に袂の中を當てさせる 醉夢
友達は望遠鏡を拭いてくれ 助六
友達の中に禮儀なパスを呉れ 紋太
セルを着て友達世話をやいて かのろ
友達の手前支拂手際よし 柳々
三次會友達だけの顔になり 同
世帯した友達來いさ云はぬなり 翠峯

友達に逢へば飲手になつてゐる 同
打解けて友達酒の癖が出る 秋晴
春雨が彈けて友達身が持てず 同
友達云はさめ様な門構 舟々
友達の國に名所の多いこゝ 同
友達がセルなら僕もセルで行こ 一路
仲よしこ僅か二本で酔ふて出る 同
佳句
天六へ友達來て寒うなり かのろ
出世しても友達の家にて泊り 鮎美
友達さ知らず素氣ない御寮人 毒仙
世話をした上に友達氣をつかひ 炭車
久々の友の吃りもなつかしく 舟々
打明けて友の寢息の亂るゝ夜 十字路
飯事の母になりたい連許り 萬よし
友達の肩はすれ合ふばかりなり 山雨樓
花持つて女友達雨にくる 煤女
友達が不思議に堪へぬ腹を立て 紋太

一〇

友達へ命預けて飲んでゐる 文錢
友達云ふ友達に借があり 同
友達はその面影の儘に酔ひ 英豆
友達は三べんくらひきかされる 同
友達をさびしからせて旅で病み 飯山
戀もせぬ友達同志湯にひたり 同
友達さ出てあてのないうらゝ 同
（軸）電話口だんぐゝ友の聲に 松耶

本 棚 紋 太 選

學成らず書架道具屋に渡される 京耶
進級と共に本棚狭くなり 茂幸
本棚へ煙をかけるばかりなり 舟々
本棚の一つ博士の形身なり 流星
本棚に苦學してゐた時の本 一路
手を摺つて見るご本棚ゴミが 助六
本棚の一冊抜いたまゝになり かのろ
性の字は書架の背皮に見當らず 突支坊
本棚の謠の本に趣味を見せ 葉平
本棚の隅を動かぬいやな本 佳山
本棚のいちばん上に趣味を見せ 松耶
本棚もレンズの中におさめられ 彩秋
本棚を見れば文士のやうに見え 同
後進は書棚の前で小さく成り 萬よし
書棚から一冊抜いて人生は 同
本棚に百科全書が幅をミり 源坊

詰まるだけ詰めて本棚一つ殖え 同
 原稿のあいし書棚へ向き直り 山雨樓
 本棚の亂れも母は見逃さず 同
 弟をよび本棚の位置を變へ 飯山
 本棚に上中下巻背を見せ 同
 (人)本棚の上の時計はさまりき ひろし
 (地)本棚の字引をこゝろ皆が倒け 飯山
 (天)本棚に疊つたとこ照つたど 松郎
 (軸)圖書室の棚へ代診用があり 紋太
 退 院 互 選
 退院は後振返り振返り 加香
 退院にまたも丁稚の忙しさ 醉夢
 退院に知らず友達尋ねて來 二柳子
 退院に母は障子を張替へる 炭車
 退院が珍しう見る市營バス 葉平
 退院の後は別荘で暮らして 彩秋
 うまかつた菓子退院買ひやり かほろ
 隣室は退院さ云ふ笑ひ聲 白帆
 退院はもこの下宿へ戻るなり ひろし
 高熱の無理を退院笑はれる 萬よし
 この室のけんを退院聞かされる 同
 退院が近付いてくる空の色 源坊
 退院の後へ見舞の葉書が來 同
 退院の頭を丸う刈つて出る 翠峯
 退院に讀みさしの本大事さう 同

退院の足許へ母氣を配り 柳々
 退院の後は良いやら悪いやら 同
 退院はかくまわれてた姿なり 助六
 退院の元の家庭さなりにけり 同
 退院に少し残つた水薬 秋晴
 退院をするさみんなは夏帽子 同
 翌日はもう退院さいふ高笑ひ 佳山
 退院の朝の陽さしに伸をする 同
 退院の廊下で姑よく笑ひ 鮎美
 退院へ手傳ひに來てよばれて居 同
 退院へさすつてくれんばかりなり 山雨樓
 退院へみんな笑顔で聞いてくれ 同
 退院がふつさ一茶の句を思ひ 松郎
 退院の我家縁にかこまれて 同
 計 略 互 選
 計略があつて友達道を外れ 秋晴
 計略は火箸の先をちつと見る 一路
 計略の効が奏して廊の灯 彩秋
 計略に知らず算盤持つて見る 二柳子
 計略でやつとこゝ迄誘ひ出し 柳々
 計略に一人が這入るビルデング 醉夢
 計略に知らず空地の人だかり 毒仙
 計略の廊下事なく通つて來 葉平
 計略の裏をかゝれて恐れ入り 茂幸
 計略の裏をかゝれて恐れ入り 樂鐵

計略の程もあるこのきつい顔 加香
 計略に拾圓札をかへさせる かほろ
 計略にかゝるも惚た弱身なり 流星
 計略に知つて一度は乗つて見る 翠峯
 計略に乗つた國から迎ひが來 突支坊
 計略で慇懃風呂敷落すなり 同
 計略の顔は案外眞面目なり 炭車
 計略の一人仲居に叩かれる 同
 計略がばれて一人逃げ二人逃げ 白帆
 計略の二人へ部屋が閉め切られ 同
 計略で少し足りない者にされ 助六
 計略に知つた手紙を讀み直し 同
 もう詰り知らず相手は飛車を取り 源坊
 計略に乗りぬ相手を憤り 同
 計略に眞方角變へて逃げ 舟々
 計略の前に大盃受けてゐる 同
 本當に泣かれて無でるはけ頭 雅幽
 かたづの襖のかけに一人居る 同
 計略の脊中をボンと叩くなり 悟郎
 計略のさてこれからさあたら 同
 見ぬすいた策を先輩たしなめる 萬よし
 土砂流しよもや刑事さ氣が付 同
 計略がうまく大臣よく續き 佳山
 計略に知らず茶屋酒よばれて來 同
 計略は女房の智慧に變へてみる 鮎美

新居想片

安川久流美

この橋のですり撫でるもけふ限り
泣くな君老ひたる人は先に死ね
疲れたる足を撫づれば茶の香り
働いてゐるか夜更けの交番所
入院をする日夫に見送られ
働いて儲けた金だ轡の手に
我が顔に金魚の糞の尾いて行く
脱ぎ捨てた足袋よ疲れて俯向ける

展覽會今更我子のまづい事
 展覽會眼鏡はそばく寄り
 自由畫展無邪氣な列が外で待ち
 展覽會へ出して子供は病んで。
 三割は先生の腕の展覽會
 展覽會をお膳の上の噂なり
 先生の顔が見えてる展覽會
 秀才は展覽會で光るなり
 自惚れが嵩じ展覽會さなり
 展覽會教師の方が夢中なり
 妻さ來て展覽會の廣い晝
 展覽會子供一回廻つて來
 展覽會子の作品に自惚れる
 展覽會窓新緑に彩られ
 展覽會物知り顔でじつと見る
 展覽會子供のやうな繪も交り
 寫眞展展ケ伏屋の多い事
 流星
 茂幸
 醉夢
 翠峯
 突支坊
 助六
 炭車
 白帆
 京郎
 鮎美
 舟々
 同
 柳々
 同
 彩秋
 同
 佳山

洋畫展あんまり近う見ないもの
同
展覧會先生はまだ若い人
一路
教のない物も出てゐる展覧會
山雨樓
展覧會アツ云はせるものがな
同
裏口へ出てホツミする展覧會
同
展覧會造花へ袖が引つかゝり
かほろ
展覧會餘興がすんで見直され
同
姪さにも展覧會へ誘はれる
莢豆
展覧會無口の儘に見てまはり
同
今夜立つこを畫展で話して居
紋太
展覧會Wは何處ですか
同
展覧會感心をするばかりなり
飯山
展覧會友達の足早すぎる
同
展覧會氣に入つたのへ指をさし
同
新緑のほかには展覧會の旗
松郎
展覧會女生徒少しあつかまし
同
展覧會中途で咽が乾いて來
同

創作

耳たぶを捻り珈琲で別れた
柿さ栗實のなる頃を子の言葉
たんぽぽの花石垣を嘲ける日
校長の靴に少うし如露の水

(五月十六日)

中野柳陽

何時迄かつく岩根の透き通り
氷裏さ熱さ戦ふ間をねむり
雑巾をしほつた丈けの力にて
疲犬のこびるを人のいそがしく

借家を探しつゝ

麻生路郎

急に引越す氣になり、霞乃と二人で借家を探しに出かけた。天王寺區方面、浪速區方面で随分いろんな家を見た。始めはうす暗い家に這入つて、靴を脱いだり戸を明けたりするのが面倒であつたが、次から次へに、數多く見てゆくうちに、だん／＼趣味が出て來た。

ハウズレントが豫定額から少しかけ離れたものまでも參考のために這入つて見た。そして借家といふことに對しての知識を深めることにした。矢張りレントはレントだけのもので一長一短、なか／＼に私達の氣に入る家が見つからなかつた。まあ、これならばと思ふ家はレントが張りすぎのので引き下がらなければならなかつた。しかし、借家を見て、その建方について一つの感想を得た。

家を見るに家主の頭がハツキリわかる。それ／＼それ相當の苦心を拂つてゐる。材はなるべくやすつくやうに、ていさいはなるべくいいやうに。間敷は精々多く作るやうに、なるべく貧弱なうちに、よりよく見ゆるやうに、疊替や襖の張替まで、さうした氣持が動いてゐる。

その中には官吏などの妻君の喜びさうな間敷の多いものもある。さうした家には昔人間のよろこぶ押入が少くない。私達のやうに多人數の家族ではぎんないゝ家でも押入がなくては駄目だし、間敷が少くは駄目だし、二階が無くては駄目だし、いろんな條件の下に制約されるからなかなか適當な家を探し當てるこゝが出来ない。私は次から次へにさがし求めて行く間にも家をさがすといふことよりも、その家を建てた家主の頭が、川柳作家の作句態度と餘程似かよつてゐるのに思ひ及んで興趣を更に深めたのであつた。

金もかけずに、間敷を無闇に作らうとする結果は押入がなくなり、臺所が小さくなり二階への階段が貧弱な廻り梯子などになつてゐる。是はほん／＼に力のない作家が技巧ばかりで作句して、得意になつてゐるのと同じ類似してゐる。むやみにいゝものに見せやうにしても、その内容に於て力が足りなければ見る人から見ればあはれなボロ家と何等變らないからである。あかの戸樋さ、あかのやうに見せた塗りの戸樋さではさうしても競争は出来ない。いろんな家を見た時に私は矢張り月並な家が、いゝと思つた。月並な家には彩光にしろ、何にしろ、さつかにさつしりしたところがある。材料にしたつて相當のものがつかつてゐる。だから無闇に技巧を凝した怪しげな家よりも安心して住むこゝが出来るからである。句に於ても月並なやうでも、平淡なきつしりしたものが無闇に技巧を凝したものよりは、いゝと思ふ。



柳樽評釋

廿四篇まで

(四)

麻生路郎

(三) 初篇の句 (續き)

これ小判たつた一晩居てくれろ

雲散じ霧消ぬ、しばしも脚をさめぬのがお金の常、そのお金のために、昔からさんな多くの悲喜劇が演じられたことであらう『これ小判たつた一晩居てくれろ』をひそかに願つた町人の心を卑しい心の持主として誰が非難し得やう。穿ちの句。同じく初篇の句に

妙藥をあげれば中は小判也

さいふがある。昔の物語なごによく、浪々の身が貧病になやまされてゐるに、金云はすに、これは妙藥だからきて恵んでやるころがある。この妙藥は即ちそれである。

返事書く筆の軸にて王を逃げ

お手を聞くまでもない。王が逃げなければならぬころへ、使が手紙をもつて来た。すぐにお返事をいただきますさいふ。

なるほどそちらも急用には違ひないが、こちらも危急存亡の秋である。先づ返事を書く筆の軸で王を逃げさせたのである。將棋さしの心境を實に輕妙に捉へてゐるのがこの句の身上である。寝てゐても團扇のうごく親心

夏のひるである。母親が赤ん坊の添乳をしてゐるうちに、自分もつひうごくしてしまふ。しかし子のために蠅をおつてゐる團扇の手は、やつぱり無意識に動いてゐるのである。それが川柳子の眼に映つたのである。人情味の句

追出されました母へそつと言ひ

嫁にやつた娘が、ある日ふし實家へ歸つて来た。さりけなくはしてゐるものゝ、ごこかに沈み勝ちである。流石に男親の方は無頓着で氣がつかない。『まあ、お母さんに、御馳走でもして貰うさ』と言つて所用に出掛けてしまふ。弟や妹はお土産にさへありつけば、姉さんなんかには用はないと言つたやう

に、何處へ遊びに行つてしまつた。母親はさきほからの娘の様子がなんもなく變天古なのに氣づいて「身體でも悪いのではないか」と聞いたが、娘は矢張り「いゝえ」と言つたぎりである。「ごつもなければいゝが大層顔色が悪いから聞いて見たのさ」その時までこらへてゐた娘は「追ひ出されました」とつた一ト言、小聲で言つた。そして膝の上に冷めたいものが落ちた。

抱いた子にたゝかせて見るほれた人

女が子を抱いて立つてゐる。そこへ、その女の惚れてゐる男が来る。女は子を道具にしてその男に戯れる。

「このをぢさんは、それはく悪いをぢさんよ。人が氣を揉んでゐるのを知つてゐる癖に知らん顔をして、憎らしい人。さあ花ちゃん、一つ叩いておやり」

なき言つて、子の手を持つて男の頬をたゝかせることであるこの女の抱いてゐる子が自分の子でないことは言ふまでもない川柳以外の短詩では、一寸斯うした境地までは切り込めない。

同じく初篇の句に

子を抱けば男にもの言ひ安し

さいふ句がある。ほんこの穿ちは斯うした句にあるのだと思ふ七で盛るものさは見ぬ薬種船

魔の棲むやうなあをい海に、エキゾチックな薬種船が錨をおろしてゐる。さける船の上には山のやうに澤山な薬を積んで

ゐるが、あれがすこしづつ、匙ですくつて盛るものさ、さうしてもうけきれない。もつミドシ／＼使つてしまふものやうに思へる。そこに一つの錯誤が生れる。川柳子はそれを興がつたのである。

旅戻り子をさしあけて隣まで

旅から戻つて来る。そこへ草鞋を脱ぐか脱がないうちに飛びついて来るのは子ごものである。それが又男親にまつて、ごんなにうれしいことであらう。ぐつミ引きよせて高くさしあけたまゝ、留守中を頼んだ隣家まで禮にゆくのである。人情味の溢れたい、句である。何等の技巧もなく平淡なうちに味はひが深い蓮根はこゝらを折れさ生れ付き

蓮根にはさころ／＼に縊れがある。それをこの邊から折れさ云ふやうに生れつき出来てゐるんださいふやうに觀察したので川柳さなつたのである。滑稽が此の句の命であるが無理に笑はさないところがいい。

蔵人を霞に見そめ露に出来

奉公先から正月の蔵人で戻つてゐる娘に思ひをかけたが、それ云ひ出しかねてゐるうちに娘は再び奉公先へ歸つて往つたのである。男は忘れやう／＼しても忘れられぬので盆の蔵人を待ちに待つた。娘は再び奉公先から暇を貰つて戻つて来たのでこの機会を逸しては又いつ逢へるか知れないと思ひ、すぐさま話をすゝめて望みを達したのである。春の蔵人を霞さいひ、秋の

蔵人を露云つたところに、この作の山があるのであらうが、斯うした手法は、わけてして謎々式に陥るので好んで學ぶべきものではない。この句なごも徒らに技巧に走つたうらみがある。それに斯うした技巧は句にいや味を伴ふのがつねであるから特に注意しなければならぬ。

養父入、走病とも蔵入とも書す、三郎共奉公人春秋二季其主人より暇を給ひて父母の家に歸す、父母の家他國なる者は請人の家に行、請人の家を宿さ云、故に今江戸にては宿下り又は出番とも云、京阪は今も蔵入といふ、京阪市間丁稚は春秋各一日の暇を給ふ、日を定めず元服後は不許之、婢は幼長ともに春秋三日二夜の暇を許す、元服の手代或は蔵入を許さず、故に一日芝居見物に遣る其の費主人より供す、江戸にては丁稚を小僧と云、正月十六日七月十六日を専とす、或は他日許レ之もあり、是亦一日のみ、元服後一日の暇を給ふを總て出番と云、手代は父母及び請人の家に行こ式のみにて専ら青樓妓院に遊ぶことを風習とす、市中婢は更に一日の暇をも許さず京阪とは甚だ異也、武家奉仕の婦人は一日或三日七日を給ふ、七日夜に給ふ眞の宿さがりといふ、奴婢等に祝儀錢等を與へ傍輩に土産等の費多きか以て略之て三日等の暇を願ふ者多し云々

(近世風俗志)

やぶいり官者の宿降するを云、蔵入の義なり。藪澤の故里へ歸る意なるべし(和訓栞)走病とは遊山して元氣を養ひ萬病を走らする義なるべし。奴婢は此日主人に許されて、己が親里へ歸展するを蔵入といふ。今俗にこれを宿下りといへり。只正月十六日のみならず春秋二時に此事あり云々(燕石雜誌)

同じく初篇の句に

蔵入の出がけにものをかくされる

さいふがある。蔵入で、いそ／＼出かけやうとするこ、誰

の悪戯か、拵けて置いた風呂敷包が見えない。これなごは誰でも考へつきさうな句である。

團扇ではにくらしい程たたかれず

夏の夕である。若い男と女が涼んでゐる。いろんな話のうちに、『エ、憎らしい』と、女が手にもつてゐた團扇で男をたたいたがボソツ音が出たばかりで痛くも何んともない。男はむしろ嬉しうに笑つてゐる。斯うしたところに戀が芽ぐむ、いやさ戀の美しさがある。情味たつぷりの句。

りちぎものまじり／＼子が出る

戯談一つ言はず、朝から晩まで、てんでこ／＼稼いでゐる律義者が、律義者の子澤山でまじり／＼子を殖やしてゐるのを見るに眞面目くさつてゐるだけに何んだか滑稽な感じがするのである。

まじり／＼いふ語で律義者の生活振りさ、子ごもの殖けて行く状態を巧に言ひ表してゐるのは敬服に値する。

叱られた禿たんすへよりかゝり

叱られた禿は部屋隅の隅にゆく。よりかかつた簞笥には寂しい自分の泣き出しさうな顔が映る。それを指につばをつけては頻りにふきつけてゐる。又見付けられて叱られねばいゝが。

母親の或はおし手を合はせ

『いつその事勘當して貰ふから、それでもいゝんだね』と言つておごかして見たり、又『この母が頼むからこんごかぎり止

めてお呉れよ」ミ手を合せて、下手に出て頼んで見たりするの
も母の慈悲を有りがたいと思はず

母親はもつたないがだましようい

でなか／＼にぎらが止まぬのも浮世の常か。

けいせいも淋しくなるミ名をかへる

賣れぬさびしさは、いつのほきにか若い花魁の下につかねば
ならない淋しさであつた。それは身を切られるよりも辛いこ
であつた。それがために若々しい名に改めてモ一度花を咲かせ
やうさいふ氣にもなるのである。

貰ひ乳にかはる砵の力すぎ

乳呑み子を殘して女房に死なれた男が砵をうつてゐる内儀の
ミころへ乳を貰ひにゆく。「又吞ませてやつて下さい」ミ子を
その内儀にあづける。そして内儀が乳を吞ませて呉れてゐる間
代つて砵をうつのである。今のやうに牛乳だのミルクフードだ
ののない悲しさには氣がねをしながらも乳を貰ひに行つたもの
である。その氣兼ねが、砵を代つて打つのであるが、男ではあり
又慣れないこゝで、又しても力が這入りすぎるのである。句
が活きてゐる。

手拭ではたいてせけん腰をかけ

女衞が女を貰ひ出しに來たが、あまりの汚なさに、そのまゝ
腰をかけかねて、手拭で埃りをはたいてから腰をおろしたさい
ふのである。埃りをはたく間さへない貧しさから考へても肝心

働く人が病氣にかゝつたので娘が妻が身賣りをするのであるこ
ミが想像される。悲惨な人世の一面を僅々十七音字によつて遺
憾なく描き出してゐる。

ぬひものを少しよせるも禮儀なり

内儀が針仕事をしてゐる。そこへ客が來た。「これはお珍
しい、さあさうぞ」

ミほんの少し縫物を片寄せる。別にそれがために座席が廣くな
つた譯でもないが、さうするのも一つの禮儀だミ川柳
的觀察をくだしたのである。

宴遊會模擬店

の御用は 新衣橋 萬よしへ

人事秘密探偵は

北濱一 赤壇探偵社へ

人氣の人氣の

羽車ソース

東京支部柳話會

同人 檜 山 千 代 二

年來の懸案であつた此の催しを突如柳路居で、四月二十七日夕開いた、それは蛭子省二氏の御上京を好機に、本社同様大々的歡迎の意思表示でもある。氏は非常に多忙なプログラムから時間をさかれ、高圓寺驛前に新店を構はれた柳雨翁の道案内で家を探され、駒人は速達一枚で第一着に馳せ参じ、四人顔が揃つたのは七時をいくらか過ぎてゐた。お互に空き腹、柳路夫人のけなけなな褌掛に牛肉鍋のお世話、次ぎから次ぎに酒瓶の運ばれたのは感謝に堪へない。やはり川柳女性であるに親愛の念が湧く。

柳路のお子さんも大きくなつて席に列び、路郎主幹の事をおほろ氣に話すのもいぢらしい。進行隊の駒人に依り省二氏の提唱で本誌四ノ三から自信一句を檢討する事になつた。

鶏は賣つたご母の淋しそう 駒人
柳路千代二の「鶏」は「も」にした
方が主觀の閃きが一層明かに出はせぬかに對し、作者は大反對で僕の家は鶏を賣つて迄生計を立つる程ではないとの猛烈な逆襲振りには一寸ギヤフン。老母と平塚中野に離れんゝで暮してゐるため老の手にには餌の始末糞の掃除の煩雜にはさゝ困つて、我兒の顔をみるや直に鶏は賣つたご告げる慈味の表現である、さアノ大きな眼をみはる。そこで省二氏は修辭上リズムの方面を専ら説かれた。

猫の目のような男で儲け得ず 柳路
「猫の目」は移り氣の多い事、小唄口で

一八

目先計り早く儲け仕事に色氣たつぷり、そつした人な鬼角探算足つて儲けなし云ふ意なりや省二氏の問ひが出た。大

創立三週年記念川柳大募集

課題「大嘴」遊一題三句吐（半紙半切三句宛題別記）

選者 賞 天 金側腕時計一個
地 米澤織一反
人 復興債券一枚
五客 置時計一個宛
佳吟 記念品

特選 全國各地大家十五氏共選
賞 合點一等復興債券（五圓券）三枚
二等 米澤織一反
三四九等 置時計

謝評 以下拾五等迄呈す
會費 社同人拾七名（三光五客記念品）
締切 金五拾錢（小爲替の事）
發表 六月十九日
投句所 投吟者へ發表誌配送
山形縣米澤市新町（吉田方）
藤 沼 梅 笑 宛
主催 米澤 川柳松川吟社

阪時代の作者の全盛を知つてゐる駒人千代二は、そうではなく機敏の形容即ち目先のきいた男々に離賦すればする程、

今では景氣も悪く儲けがない『猫の目』
さ云ふは大阪で特別の譯がある點を除べ
たら、省二氏はそんな慣用があるものな
のかと興を覺て居られた。句主は近代
的の淺薄な資本家の態度を詠むものだ
と説明があつた。

振り切てみれば同じ人の子よ 千代二
柳路 駒人譽を列べ 朦朧主觀句の攻撃があ
つた。超然と人間を觀た時の心持ち、例
へば金の借り手と貸し手も人の子である
區別を一枚にした冷靜な人類の平等觀で
あるに應酬した。省二氏は別方面の『樽
拾ひ』吟から説破され句の表現不足は常
に損な立場に置かれると言はれた。

一ヶ月以上に亘る旅行中の御不便は何
んなりやと柳路夫人の問ひに、味噌汁と
漬物に事缺ぐと菜食論があつた裡に、お
勝手から運ばれた漬物を、うまそうに食
べられる全く愛の交感である。夫人のお
手並を賞められる。句三昧に入る。

カーテンの際で倒れ暮に成り 柳路

銀行の休業札へ散る櫻 同
つつき合ふ箸睦まじくぬぐ羽織 千代二
たぐの齒切とベットの方々看る 同
行李丈け一と日さすを驛を出る 駒人
牛肉の煮つまつた頃夜が更け 同
素性の判かる世辭を言ひ 省二

川柳「三十石」創刊號

◎募集 吟

- ▲雜 同 人 共 選
- ▲出世 小田 夢 路 選
- ▲人 形 庄 萬 よ し 選

▲一題二十句以内 締切六月三十日(嚴
守) 用紙は必ず郵紙或は半紙に限る ▲
各題別紙に認め住所氏名を明記せられ
たし ▲投稿者全部へ一部送呈 ▲郵税二
錢投句と同封すること

◆每號評論、隨筆、漫文、吟行、小品等
を募る投稿大歡迎
投稿所
大阪市西區南堀江通六丁目二〇
山本 秋 晴 方

川柳めば吟社
電話國體川一二四番

鐵瓶の亭主の燭へ横をむき 同

最後に省二氏へ古句上の一語を望むだこ

ころ『二十四篇まで』に出た

指を切るからは九品の淨土まで

は類句を斯く擧げるミ、九品は九本のも
ぢいであるは必ずしもいなむわけにゆか
ぬが『九品の淨土』を其儘で句を活かす
解釋が必要である。句品からして惡推量
を生ませぬ場合には、殊更な詮議をせぬ
事が清淨な胸懷であらう。又某誌に

嫁の手で取るのは飛ばぬきりぎりす
をカルタの遊びと云はぬ所に餘韻のある
秀逸句だミ評せられたのは随分見當違ひ
で、作意豊かな智覺をしゆる作である。
古句の研究家中には詩的感動をもたぬ句
評を下される恐れがあるからお互更に油
断はならない。

時針過ぐるを知らず十一時半、高圓寺
驛初夏の靜けさ、電車まつ間も川柳を語
つて倦むを覺へなかつた。

ほつそりとエビスセイシでございます
睦まじう日を打合はします 子さん
群衆をいつの間にやら柳路めけ
丸の内千代二は天を仰ぎつゝ
駒人の目玉に子供虫が出る

川柳 累卵の遊び (二)

路 柴 舟 郎 評 畫

夕闇は胡瓜を刻む手に迫り 天 花



夕闇は美し。すべてのものを美化す。胡瓜を刻む首さへほがらかに、ザツク ザツク、ザツク、ザツク。聴て郎君御歸館ある

べし。型の如く接吻する。一時間後、ビヤノ鳴り響く。婦人雑誌賞談の腕前なり。郎君謹聴す。暫くは家庭圓滿なり。



おごつたかおごられたのか笑つて出

吐露樓

金が敵いふことあり。その敵に巡り逢ひたしめて鯨鯢する人あり、鯨鯢せぬ人あり。友情は常にその埒外にあり。AよりBにBよりCに轉々して大いに吞むあり、吞まぬあり。圓タクそのために生れたるや否やは知らず。浮世は面白し。

松竹へ這入つて母へ楯をつき 花童子

一少女あり。生れながらの不良にはあらず。松竹に入る。映畫



劇志願たるやいふまでもなし。いつの間にやら、モダンガールの眞髓を會得し、男を男と思はず、母を母と思はず——母の嘆聲天の川のごまく長くして儚なし。

嫁の愚痴和尚からく笑ひのけ 美の作

嫁の愚痴、これ一種の日課なり。和尚の胸中を按ずるに『然らず』と言へば逆鱗に觸るゝこゝ火を睹るよりも熾かなり。さればさて『左様々々』ミ一から十まで肯定するこゝは思ひもよら



ず。呵々大笑して、その一言に同じたるが如く同ぜざるが如き一策、和尚たる又難いかな。



病床獨斷語

—柳界の流れと歩み—

木村半文錢

の愛好者には、酷くむつかしいものを見做されやう。難解なもの
のこ見做されやう。

川柳も、革新派の手に渡つてから、恐ろしくむつかしいもの
になつた。哲學ごされ、科學ごされ、社會主義ごされ、いふ
調子だから、川柳の本質が、思索に悩めば悩むほど、恐ろしく
むつかしい内容になつて行つた。たかゞ、十七音字を基調とす
る短い詩型であるから、内容が複雑であれば、従つて複雑な川
柳がつくり出される譯である。それに此の短い詩型へ複雑な思
想を、盛り入れやうとするから、結果として詩語の極度の經濟
整理が行はれるのである。なるべく短い言葉で適確に表現せう
とするから、難澁な句が出来上がる。旨く詩語が生ざればよいが
でない場合は、難澁そのものゝやうなものに代つて了ふ。殊に
暗示を生命とし、餘情や餘韻をたつぷり含ませやうとするの
であるから、可なり、川柳一句の創造はむつかしい。亦、さう
した苦しむ川柳を讀まされる一般の川柳家や、局外にある川柳

の愛好者には、酷くむつかしいものを見做されやう。難解なもの
のこ見做されやう。
川柳の創生した當初は、江戸の元祿期の文化を背景として、
承け繼いでゐた。所謂徳川治政の礎石が築かれた後で、江戸の
市民は泰平を謳歌し、逸樂に耽つた時だ。川柳即ち柳樹も、斯
ういふ環境にあつて芽を生じた。前句附の萬句合せ興行から、
附句のみの獨立による柳樹の發刊になつたわけで、多分の景物
によつて、當時の江戸の民衆を吸引したのであらう。亦、當時
の事情なきを窺に考へてみるに、江戸の市民が、その熊公八公
階級にまで理解のできる文學を扱ふことによつて、單に景物の
みをめやすとする唯物觀念ばかりでなしに、文學を慰み得る悦
びをも感じたのであらう。日本の文學史上、眞に民衆の手にま
で歸したのは川柳であつて、和歌や俳句は、同じく貴族階級か

ら地下（民間）の手に渡つたが、まだ特殊階級の人々へのみ限られてゐたやうだ。熊公や八公や太郎作や五郎兵衛に、和歌俳句の境地は特殊のものとして暗黙の中に境界が設けられてゐた。その點になれば、川柳は至つて民衆的で一般的で開放的であつた。誰れでも覗くことを許された文學である。だから川柳を民衆詩とよび、一般の人々からは床屋文學の名稱を受けたわけだ。即ち當初の床屋の環境に了解される程度の文學を意味したのである。それはいづれにしても宜いとして、當時の江戸市民が、いかに文化に浴したことを感激したであらう。永い間の戦禍は、民間を極度に疲弊せしめて、文學なごの有難味を知る餘裕なきはみじんも與へられなかつた。それが一朝徳川の手に政權が歸して、江戸の開拓となり、建設となり、漸く元祿期には江戸を中心として泰平謳歌の聲を聞いたのだ。忘れてゐた文學が民間の中から擡頭したのは當然である。武斷政治の反動として、（徳川幕府の施政方針にもよるのであるが）儒學や國學の勃興となり、その文學熱が民間にまで普遍して、いろ／＼の形式によつて、姿を變へてあらはれた。浮世繪、演劇、黄表紙、洒落本、稗史小説、音曲類から、俳句、川柳、狂歌に至るまで一齊に顯現されたのであるから、實に其の文化の隆んであつたのは想像するに難くはない。確に、奈良文化、平安朝文化や鎌倉文化や室町文化とは、本質を異にした創造帶に起つてゐ

やう。而も、斯ういふ文化の中心が、當時の一般民衆の中に營まれたのは驚異に値するものと云つてよい。

川柳も、同じやうに民衆の手に生れた。純然たる民衆の手に生れたのだ。そして民衆の手によつて流行せしめられたのだ。

一方、俳句が芭蕉の手に統一されたに等しく、川柳も亦、前句附の俳諧から附句をのみ獨立させて、初代川柳翁の手に統一された形であつた。當時の前句附の點者なるものは、随分多くを數に得られる。江戸の各區を通じて百人近くも仕んでゐた

らしくも想像される。それが板井川柳の萬句合興行から、例の吳陵軒可有の『やなぎだる』發刊に進み、全く江戸の前句附興行は、初代川柳の手に歸して了つたのであらう。景物さか人氣取り政策なきは、可なり吳陵軒の手に講じられたしい。『やなぎだる』の序文を見て行くと、或は次回の景物を字結びにして俳諧に仕立て、暗に徵發したり、角力興行に因んで勝句の作家や組連中の名前を披露したり、いゝんな人氣政策を講じてゐる

今日でいふ、宣傳といふことは、當時の萬句合せ興行や『やなぎだる』の發刊に當つて、相應に行はれてゐたのは想像されやう。亦、一めんに吳陵軒が、初代川柳をもち上げたのは當然であらう。川叟なきは其の著しいもので、俳句道の蕉翁に酷似してゐる。尤も、吳陵軒は初代川柳の門人であるから、尊敬の意味もあつて初代川柳を奉つたものであらう。芭蕉がおぎな

門人に奉られて、ひさく身分不相應の過稱であると言つて叱つたのは有名な咄であるが、川叟なごは、いく分蘊翁の向ふを張つたやうでもある。

さういふ事は兎に角として、川柳が一般民衆の手に、これだけの歡迎をうけたかといふことは、寶曆から明和へ通じて、毎季の句數に一萬も二萬もあつたといふのを見ても分る。「やなぎだる」四編の、吳陵軒の序を見ても「淺草新堀端の考士川叟萬句合發しめづらかなる言葉に當世のはいかいさひこしき句姿を新斧せしに、或は一萬或は二萬の句あつまる事、此考士の妙さや言はん、徳さやいはん」云々と言つてゐるやうに、其の如何にさかんであつたことであるかを偲ばせるに十分である。これが假に明和二年の「柳樽」第一編から、毎年一冊宛の發行をみて、川柳の歿した寛政二年までには廿四編を重ねてゐるから、ざつと二十年乃至三十年に近い年間を、初代川柳中心としての興隆があつたわけだ。「妙さや言はん、徳さや言はん」ミ吳陵軒をして言はしめたのは、實に此の消息にも含まれて居やう。いくら民間の人氣に投じて、景物澤山であつても、亦宣傳上手であつたにしても、二十年から三十年の期間を、一人の點者として、川叟にまで獨占せしめたのは、確に、點者としての眼識もあり至藝もあり、人格もあつたのであらう。特に「柳樽」七編の序に「絹布に正札附あり、蓑蓑に正直あり、其店市

をなす、今川叟の評は正道を専らとし、いさゝかも最良の沙汰なし、故に年毎に寄句増員す」ミ吳陵軒の鼻を二寸高からしめたのは初代川柳の所謂「正道」ミして、一般の點者が試みたらしい八百長や不正手段や行はなかつたらしい根底もある。川叟をして點者たるの獨占をなさしめるために、いく分の排他的宣傳語が見られないことはないが、何にしろ、二十年も三十年近くも、其の門前市をなしたといふのであるから、「正道」は明かに勝利を得たのであらう。他にも「柳樽」類似のものが刊行されて、敵對行爲を示したものであるであらうが、やはり初代川柳の手に、實權は握られたのだ。

川柳の前身、折句のやうなものが關西地方から、江戸へ傳へられて、それが機敏な江戸市民の手に渡つて、今日の川柳にまで展開されたのださうだが、多くの文學も亦、さういふ経路で上方筋から江戸へ入り、大成し、完成し、地方へ送り出されたものであらう。所謂江戸ツ子式の機敏・快活さは、川柳といふ短詩型によつて、尤も鮮明に現はれ、獨得化してゐるのだ。然し、機敏なものは一面に失敗しやすく、飽きつぱいものでもあるが、川柳の進み方、人氣の沸き方は、大變な勢ひを醸成して日本の文學史上、俗文學に特異の光彩を放たさしめたものだ。それは、民衆そのものが、いかに思慕した文學なるものに、愛着を抱いて日夜溺没したかを見る能い史料であり、亦其の立派

な證據でもあらう。あながちに、川柳の生れた事情や、民衆の手に悦ばれた關係を、當時の俳句に對する反動としての狂句出現に決定することは、少し異論があらう。斯うした文學を待ち焦れてゐた當時の民衆の心理狀態にまで研究を進めなくては、狂句の出現を論じることには、かなもの、言ひ方は利かれないと思ふ。

前句附の附句を獨立させてから、川柳の歩み方は、全く詠諧の支配より解放された、純然たる創造帶に及んでゐる。諷刺、嘲罵、批評、滑稽、人事寫實に獨得の價值を認めせしめた。民衆詩として江戸の市民の手に創成されたのは偉いせなければならぬ。黄表紙や洒落本と共に大きな民衆文學の建設であつた。此の當時の川柳を按ずるに、久良岐氏などの力説せる、社交的氣分詩であるといふ意見は妥當性をもつやうである。確かに、社交的色彩が濃厚である。一例をあげるに、吉原を中心とした遊興や山谷をめがける逸樂關係や、單に床屋、湯屋、料亭、町内の寄り合なごの環境をみて、その如何に、社交性が結ばれてゐるかを知らねばならぬ。川柳の萬句合興行にしても、其の出句者が各町の組、連などに委託してゐるのも、此の間の社交的氣持は分ると思ふ。景物をめがける心理の底には、社交を中心とした人々の、純な感激や誇りを洞察される。高點を爭ふ内面には、衆と共にたのしみ、遊ぶと云ふ、社交的な意圖が認め

得られやう。川柳の發達した關係を、この社交的な現れとしてみる事も、一つの妥當な見解であらう。それだけ當時の民衆には、泰半氣分に酔ひしれるだけの、餘裕があつたのであらう。狂句にしろ、川柳にしろ、寸閑利用の餘技として、至つて短い詩型だから、その當時の、おほらかな氣もちや、のんびりとした營みに、理想的のものであつたに違ひない。

川柳が、この社交性を帶た享樂主義、耽美主義に、その全容を整へてゐることは、『柳塘』の廿四編の中に認め得られやう。大半が遊興本位であることは、誰しもが氣づくところであるが一方、民衆心理の赴くところとして、自然に上を諷刺し、武士を嘲罵し、惹いては、民衆それ自身の意久地なしにまで『穿ち』の惡聲を放つに至つたのである。江戸ツ子の機敏性は、氣短となり、潔癖となり、啖呵になつて表現されたのは當然の歩みだ。殊に江戸市民が、武士階級に反抗の氣勢をあけたのは徹底した辛辣にまで及んでゐる。浪人生活のみぢめさを皮肉り、嘲罵したものは、實にもの凄じところまで進んでゐる。日頃養はれた武士階級への、民衆的反撥である。反抗である。彼の米搗の越後者や乳母や女中の信濃者に對しての侮辱的態度は、それと同等位にまで武士階級に及ぼしてゐる。耽美主義の反面には所謂寸鐵殺人的な自然主義傾向をも見免すことは出来ない。それに、江戸市民そのものの生活も、直接に反映して、人事

詩、社會風俗詩と呼ばれる所の寫實主義も普遍的に發達されてゐる。洒脱な氣分や輕快な氣持やは、その間に織り込まれて、寫實主義に一塊の肉を與へてゐるのを見出すことが出来る。今日でいふ、垢ぬけしたものは、江戸市民の生活が、よく洗練されて來たからであらう。泰半の逸樂氏として、遊藝や嗜好物に、通じなり、垢ぬけせんことを願つたのは、遊興本位の墮落でなしに、江戸市民の中央集權的な自尊心や誇りにまで必然的な要求たらしめたものであらう。徳川の治世を讚美する意識は所謂權理様の入府以來、江戸市民をして、ざれだけ自尊心を涵養せしめたであらう。江戸ツ子の優越性は、斯うして權理様を背景として活躍したのだ。遊藝や舌の發達は、江戸市民の、排他的な優越心理から促進されて、遂に、あゝした江戸趣味萬能時代を現出したのである。

川柳が、特に江戸市民に限られて、發達したのは、排他的な現れであるかも知れないが、由來江戸市民の將軍様お膝にたる優越性が一寸他からは寄りつけなかつたのであらう。上方ものを見るに『何だ贅六が』と噓んで吐き出すやうに扱ふたのは、今日でもハツキリと東京市民にしても名残りの倂を存してゐやう。だからその傾向が上方ものにして京都人や大阪人を侮辱したよりは、その他の地方民にまで極度の排他的感情を及ぼし、壓々として具體化されてゐたであらう事と思ふ。この顯著な優

越心理は、川柳によつて可なり窺はれ得やう。他を排する傾向は、自然に江戸中心としての、民衆的團結もなつてゐる。江戸を愛する江戸ツ子は、極度に他國民をしりぞける性能を胎生した。川柳が、江戸市民の手に完成されたのは、この排他的な感情も手傳つてゐやうと思ふ。優越感の躍動は、他國民をして近付くことを許さぬ、權威としての確守でもあつたであらう。自由に、開放的に、民衆の手に芽ぐみ出した川柳も、廣い眼でみて江戸市民——江戸民衆の手に限局された、民衆詩であることを知らねばならぬ。江戸中心の民衆詩とするよりは、江戸そのものの、民衆詩であつたのだ。江戸を中心として、地方的に分布された普遍化を見ることは出来ない。即ち江戸市民の民衆詩であつたのだ。その點で、吉原中心の社交詩であるさか氣分詩であるさかいふことは一面に當て候まる論理でもあらう。

それに特に注意すべきは、川柳に現れたる江戸市民の批評的精神である。この批評的な味を、その内容にこみ入れたのは、恐らくは川柳獨創の強味であらう。歌や俳句は、自然現象や感情に重きを置かれてゐたので、批評なきの理智的な臨布は許されない。その點、川柳は寸鐵殺人的な批評に成功したのである。狂歌なきにも、此の批評精神は芽を出してゐたが、川柳はきん量的な發展がなかつたやうである。彼の落首なきの幕政批判や失政諷刺は此の批評的精神の畸形的な現れでもあらう。(未完)



川柳塔

○

林田馬行

「欺かざるの記」なごを並べてまだ起きず
主義あつて朝は十二時夜は三時
糸爪忌や疲のつまつた面構へ
ばてれんに特震ふ町奉行
賞めてるをだんく聞けば序文なり
二十四間道路を今日も職がなく
圓タクは資本家になる暇がなく
正帽の八月兒なご誰が見る
兒を抱けば兒は泣きやみぬ夜の二時

○

西本三笑

染直し且那この頃遠ざかり

○

喜田飯山

延若をくさすミ口紅尖らかし
母に似た顔で生れよ罪の子よ
妻もセルを着た鬚でも剃らうか
女でさへあればと思ふ氣にもなり
哥澤に娘蚊のよな聲になり
内の人男だてらに柄をより
世話になるならんで母娘もめてゐる
千支だけを言うて女はあてさせる

うちの子に限つてさいふ顔になり
夕飯は早うにすんで琴をひき
大阪のひろさ先妻にも會はず

かの後家が孕んださうなさもあらん
熱い茶をふきふき親を思ふなり
いつ來ても友達ここにこへ坐し
一日を負ふてやつたりおろしたり

○ 横田 眠 聲

五月晴もつゝ土堀れ男の子
春雨がしごく母は頭痛もち
氣違ひの番へおもては五月晴
初戀のただ一心に紅をつけ
人里は遠し雁さんで行き
人生の半分過ぎて子が一人
義理がたい男で雨を苦にもせず
妻呼べば二階で箆箆拭いてゐる

○ 岩崎 柳 路

ビルデング下には別な風があり
萬年筆持つて女房のかしこまり
鳴く鳥の喉にかすかな力見せ
ジレットの切れ味も佳し朝の風呂
齒車をじつと見てゐて恐しく
天勝の年幕合に繰つて見る

○ 庄 萬 よし

終りまで忍んだまゝに老いたまひ

子のないが人形なぎにこつてゐる
刑事もう刑事を忘れ飲んでゐる
終電に車掌同志は別な聲
バラダイス言譯程の流なり
男手で育て流しに連れ歩き
角帽の子に初午の馬鹿々々し
何事ぞ花散る軒の禁酒ビラ

○ 酒井 駒 人

春の川向ふ岸にも咲いて居る
母の身を案じ夜行の人となり
公休日劍劇さきめ朝のめし
その事は母にまかしてよい娘
海岸で帽子の飛んだ面白さ
子供より子守がうまい三輪車
嫁に行く女中母への祝ひ物
丁度よい木蔭に重い荷が止り

○ 奈良井 仙 坊

新參に息をつかせぬ用をさせ
夫婦雨の夜を昔の若い心になり
暗算をして三錢の損をする
店の客踊るを待つて叱られる
繪の事を云ふ一枚頼まれる

○

高橋かほる

大阪は轢れかけても好い所
 かる焼をはり醫の軒で賣つてゐる
 唯一人來て常盤座のむせる事
 ちよいくさあごがはづれる好い女將
 灰吹を洗ふおちよやん松づくし
 植木市花の先生にたたかれる

松本助六

先生の退院を祝す(二句)

御無沙汰を詫びて燈心少し揚げ
 チウリツプ待つてた様に咲きをくれ
 心配のあごをなざれば髭の音
 い、蛸へ銚子つまんで來てくれる
 刀鍛治妻の燈明で氣に入らぬ
 欺されて欺さぬ様に心がけ
 二階のへ貸してゐるらしい人が訪ひ
 ひつたくるなりりレー走る事
 メガホンは方向換へて又うなり
 鳥の渡りしを見る夕まぐれ空
 ゴム印を押した氣持の日は續き
 病み上り蛙の逃げた跡に居る
 手拭をバチンと朝の氣分なり

百圓程で押へつけられてゐる

太田朝陽

口傳はこゝと膝高く打ち

虎の威をかる門番のにくらしさ

撒永車足ばかりは涼しさう

新設の交番へ巡查堅く立ち

春づく陽壁を流れる佗住ひ

それだけの女でもなし子は育つ

女氣の呼んで練をばつゝかせる

善男善女を欺すは坊主のみならず

高見から見てた時をば云はずして

菊池寛大阪言葉知りやはらん

お前お前さよく喋舌る母

糸卷の一つに嫁のたましひが

父の代からの一つに火鉢あり

一盛のいちごへ初夏の陽があたり

寢て聞けば港へ着いたらしい音

掛取はモラトリウムも心得る

家出して母のこゝから案じだし

父の目には一人前に見えぬなり

橋本二柳子

生業の古川柳

東京支部

川柳行脚中

 岩崎柳路
 蛭子省二

川柳行脚の賜きして、東京支部のお方々度々會合するお約束をした、或時支部の活動云ふ事が話題になつて、何にか纏まつた事をやつて置かうと、温古方面知新方面に分ち、後者は第一回は柳話會が催された、前者には工夫を凝らしてみたが自分は旅の事にて参考書を持たず、實は支部にも揃つてはゐる所から「柳樹研究」誌二十一號に、秋農屋翁の「江戸の物質」(扇賣外二十二項)の趣味的記事があつた、無論此の續稿が近く發表される事ではあらうが、雜誌にはお互に勢力範圍があつて、同じ事項を掲載しても支障はなからう、發表済みのものを、大略纏めてみようではないか、と、柳路氏と電話なごでも打合せをして本稿を作成した、従つて類句は多くを挙げ得ないのみか、説明資料は近世風俗志の生業

下の巻を照合する事にした、同書は京都大阪江戸の風習も併記してあり、此位川柳家々啓發して呉れた書物も少いから便利に甘ねたのである、圖書館に二三日通ればより以上の資料のあるはわかつて居るけれど、今は果し得ない、研究ではなく、ほんのお笑ひ草に過ぎない。
(四月下旬記す、省二)

(一) 油賣

十二月ひろのおそろしき油賣
 油賣まひるに一筋糸をつぎ
 打わらを手拭にする油賣
 三都其扮相似て専ら藍の織色綿服に、漆の胸ある前垂をしたり、油桶の制も又三都相同じ、蓋し京阪は樽の下に簀を用ひず、江戸は桶下に箱あり、油賣の手に携ふるは油さし也、銅器あり、貧戸にては陶器をも用ふ
 漆屋はの字油屋しの字なり

油屋はしの字にまけをたらすなり

(二) 飴賣

三都さち其扮定なく又飴製にも數種あり
 唯江戸に一種毎時不易の飴賣あり賣辭に下り下り云、原京阪よ贈り下すの橋け
 歟、又曰江戸飴店には必ず湯を描けり
 くだり賣小桶の中にかんかな
 地て出来る 飴をくだりさ呼び歩き
 くだり賣水を五合もつてゐる
 くだり賣貧乏樽で手を洗ひ
 家鳴震動してくだりや四文さり
 めけたらしよ、きせるの古いさ、みつかへべにしよ、さ呼ぶ「みつかいへい」云ふが江戸にはあつた。
 久しくなりぬ住吉を飴にかへ
 住吉はキセルの事、現に朝鮮の飴賣は全く此の式である「飴賣の笛ふくこは和漢同じくて漢土には古きここみゆ」である

もろこしの音曲で賣るあめんぼう
 朝鮮の助六無地の傘をさし
 降る雨さ賣る 飴傘の上さ下
 飴賣だよ唐人へ指をさし
 唐人はあくひのやうな笛をふき
 飴賣は辻で呼子の笛を吹き

(三) 飴細工

飴細工は皆必ず蓑蓑の頭に粘す又飴丸を

腹頭はらごしらに粘ねし之これを吹ふて中ちゆう盛せうの大丸だいがんとする専せんら藍紅あいこう等を以もつて彩さい之諸形しよけい共に鉛細工えんさいこうは製せい後ご彩さい之也父昔ふしは鳥形とりけいを専せんとする歟や今世こんぜも鉛えんの鳥とり云いつて鉛細工えんさいこうの惣名そうなとす又京阪きやうはんにては前に云丸いんまるを吹ふき大だいにしたる者を吹ふ掛かけと號ごうし専せんら腹頭はらごしらに粘ねし未いまだ吹ふ廣ひろげざるを買かつて自ら吹ふ之故ゆゑに吹ふかけと云歟やつらをふくらし世よを渡わたる鉛細工えんさいこうを賣うつ

鉛細工えんさいこう雀すずめをよしへ留とどめて賣うり

(四) 大根賣だいこんばい

初松魚はつまつういのおごりに、客大根卸きやくだいこんおろしの所望しよぼう、折節大根賣せつせうだいこんばい來たるを呼よこみ、此大根このだいこんはおれが物ものより細こいといふ、大根賣腹だいこんばいはらをたて、お前のものがさのような道具どうぐだきて、此大根このだいこんより太ふとくはあるまい、亭主ていしゆ、そんな賭かにしやう、若此大根わかこのだいこんより太ふとくは如何いかする、酒さけを買かませう、俺おれが勝かちつたら二百ひゃくに只ひき取山とけさんだよ、お合點あてんださ、較くらべて見た所ところが亭主ていしゆの勝かち、大根賣だいこんばいも興きようを覺おぼし、一言ひとことの詞ことばもなし、女房立にようたちち出で、大根屋だいこんやさん、馬鹿ばか者に構かまはしやるな、大きな冗じやうな隙ひまを費つやしたの、その代かたりに年茄子としななすでも持もつてござれ、又翠丸あきすまるさくらべるのか（咄の開帳）直ただの出來きるうち大根だいこんの毛けをむしり

(五) 花賣はなばい

水仙すいせんを一ひと手ていくら値ちをつけるさぶの坊ぼう程ほどは花屋はなやも活きるなり三都さんとともに花賣はなばいには男子なんし多く又また儒にうに老姥らうらもあり佛ぶつに供くする花はなを専せんらさし活花きふゐに用もちふる花はなは少すくし或あるは五文ごもんもありそれより十じゆ世文せもんを供くするもあり親鸞しんらん宗しゆは貴價きげの花はなを供くする、三都さんと相似さうじし江戸えどは八文はちもん以上いじやうを賣うる大約だいやく江戸えど小價せうげの物は四文しもんより四十八しじゅうはち文もん六十四文ろくじゅうしもん凡およして四よを積たんで價げとすこゝ四當錢しとうせんを專用せんようとする故也ゆゑなり

(六) 削掛賣せうかけばい

削掛せうかけの事は非諧ひはい歲時記さいじ葉草えそう其他參照そとにさんしやうの事こと、性の表へう象しやうなり、斯道しだうの専門家せんもんかには趣味しゆみある考證かうしやうあり「卯うの木きを以もつて製せいね上げ客きやくの如ごとく下したは細こく削くり掛かけたり小なる物長ものながさ二三寸さんすん大は尺餘しちよもあり武邸ぶていは尺餘しちよの物を用もちふ民戸みんとは専せんら小形せうけい多し門戸もんこ正中しやうちゆうの上に釣つる」南畝なんお曰い削掛せうかけ二三十年にじさんしやう前迄まへは明松めいそうを削くり或あるは橋はしをも削くる今は削くる人なし、守貞しゆしん云い今は自ら不削ふせう也數十しゆくを四錢しせん計けいりにて賣うり來きる故也ゆゑなり古ふるは自製じせい也削くり掛かけはんでうちらんのか（七）で賣うり

(七) 茅花賣ちやうはなばい

本艸ほんそうに「白茅はくちやう藥やく才さいのごとし、故ゆゑにこれを茅ちやう云い白花はくちやうを開ひらく」茅生原野堤塘ちやうせいげんやていとう春有はるに兒女拔茅針にやうに爲な 尚なほは茅花ちやうはなを食くへば肥こゆる云い傳でんへられて居ゐる、萬葉まんやふに紀きの女郎にやうらうが家持けもちと贈答くわうたふに、わけがためわかもすまに春はるののにぬけりつばなをのして肥こませ「我われきみにわけはこふらん賜たまひたるつばなをくへさいややせにやす。其他そと小便せうべんを治なおすこか血ちを止とどむこか色々いろく々々く藥用やくようとして効能きうのうもあるところから、村童むらどうが江戸えどへ賣うりに出たものである。

おれがなも買かつて茅花賣ちやうはなばいはなきつばな賣うよく見れば女にやうの子窓こゝろへ手てを出でて茅花ちやうはなの錢せんをこりつばな賣生醉ちやうはなばいせいすいに二把にたださられ買かはないと通とほさぬ云いふ茅花賣ちやうはなばいそれかみやこ一枚賣いちまいばいふ茅花賣ちやうはなばい茅花賣ちやうはなばい跡あとへつけさ奥家老おくけらう生醉せいすいが來きるよと送おくける茅花賣ちやうはなばい江戸えどへあいはんか茅花賣ちやうはなばいに云いふ茅花賣ちやうはなばいさやちりめんへこてり付つくお駕かからわんはいはれる茅花賣ちやうはなばい洗せん鯉りくつてつばなの直なをねぎり前髪まへかみの中なに目めのある茅花賣ちやうはなばいアルヘイをやればはにかむ茅花賣ちやうはなばい柳賣やなぎばいきこたき聞きこければ隅田川ぐみたがは

(八) 柳賣やなぎばい

募

集

句

雨戸

蛭子省二選

賣出しは雨戸をはづす事になり
五寸程あいた雨戸へ足をこめ
愛人の家のあまぎを見て通り
花見からかへればあまぎ開いても
張物を雨戸ですます隣同志
雨戸迄きてうれしけな病上り
一枚の雨戸をあけて用かすみ
新聞はあまぎの間にぬれてゐる
姑のあてつけ雨戸あける音
日曜は雨戸にゆれる小鳥籠
氣にいらぬ子供雨戸を足蹴にし
露天屋はあまぎを借と店に成り
叩かれてゐる雨戸から夢がさめ
雨戸まで逃げて小猫はじやせむ
別荘は二階のあまぎ閉めたまま
締切のあまぎを刑事不審がり
凶行は昨夜のあまぎしめたまま
又家主悪く言ひつつ雨戸しめ
好い天氣母おしがつて戸に張り
雨戸くる妻へ煙草の用を言ひ

吐露樓 山雨樓 秋三 美髯公 翠峰 醉夢 赤ん坊 志郎 郊外 吞陽 紫光 四呂久 千鳥 散柳 源坊 松雨 眠聲 夢人 鮎美

共稼雨戸を締めたまま出かけ
忘れてる雨戸寒さにしめに立ち
雨戸をこふたアリの部屋になり
何處へいつたさも聞か母があげ
日曜日あまぎもあけず笑ひ聲
夜逃げしたあまぎへ大屋腹をぞ
雨戸うつ風におびへる仲こなり
動かないあまぎを伯父がはづし
叱られた女房あまぎをたても
泊り客起きた知らせに雨戸あけ
雨戸をたぎつて風はにけそこね
雨戸から灯の洩れてくる峠茶屋
謎の家警官雨戸押破り
雨戸をあけて二階から欠伸する
別荘のあまぎ地震であいたまま
まだ早いあまぎを留守居閉めた
出戻りは雨戸をしめる役になり
給料日あまぎしめるも嬉れし
遠い火事雨戸一枚あけてみる
思出は悲し雨戸を覗いてる

閑路 九柳 溪象 葉山子 柳陽 雅芳 無心 小蓬 喜一 滄海 千代二 普天 突支坊 豆蔓 花蝶 詩天 若人 秋晴 松水

川柳家の戸籍調べ

□ 係 馬 行 生

(一) 姓名 (二) 雅號 (三) 別號 (四) 現住所
(五) 生年月日 (六) 職業 (七) 好きな句 (八)
好きなタイプの女 (九) 自信の句 (一〇) 川
柳以外の趣味 (一一) 配遇者の有無 (一二) 嫌
ひなもの (一三) 川柳に手を染めた年月

(一五) 西 島 ○ 丸

(一) 西島義豊 (二) ○丸 (三) 岸の家柳、岸
の柳、都野龍美、その外十五六ありませ
う。併し今は使ひません (四) 東京市四谷
區寺町六番地西念寺 (五) 明治十六年四月
九日午前十時生 (母から年中云はれるの
でそう覺てゐます) 自分ではもう一日
早いといふ思つてゐます (六) 職業云云
ひ得べくんば僧侶 (七) 餘り多くて困る、
(八) 下町風の女 (山の手に住んでゐて山
の手が大きらひ) (九) 恥しくて云へず (一
〇) 子供の會芝居芝居に貧民窟に關
する子供の社會事業 (一一) 有 (一二) 新し
がる奴、譯が判りもしないで人をけなす
人達 (一三) 明治二十九年二月 (日は忘れ
ました)

(一五) 金 津 穂 波

雨戸くる世話なく九軒長屋すみ 籬 楓
樂書があまりにふへて借手なし 一笑
牛乳屋雨戸の街をねれてゆき 鎌 月
手がかりは雨戸に残る指紋なり みな
惨劇の雨戸へ家主手をかける 町 二
かしや札奥の雨戸に松が見へ 光 路
親ひまり子一人雨戸たてた宵 舟 々
改心は雨戸の外で手を合せ のほろ
雨戸くるあひに聞ゆる浪の音 柳 秀

焼 香

焼香に面影惚ぶ眼をつむり 萬よし
立昇る香の煙に浮ぶもの 柳 陽
焼香へまだ顔見せぬ息子あり 九 柳
焼香にあれが妾さ教へられ 聞 路
焼香に泣くまいと眼をおさへ 夢 人
焼香の今日親分はすなほなり 鮎 美
焼香の順に親類よく判り 源 坊
二番目は抱いて貰つて御焼香 普 天
前の 人真似て焼香義理がすみ 千 鳥
焼香が済んで淋しさ押寄せる 紫 光
お焼香へ袴の裾を踏んで立ち 毒 仙
焼香はうごんに七味入れるやう 志 郎
焼香の長さに讀經疲れて居 吞 陽

相 元 紋 太 選

焼香もう冗談言ねぬ會葬者 翠 峰
焼香の席へ戻つて首をたれ 赤 ん 坊
焼香へやつと間に合ふ遠い國 秋 三
焼香に緋の連で泣かされる 千 代 二
一とつまみ宛に焼香念を入れ 京 郎
南無酒聖香より酒をよろこばむ 町 二
焼香を馬丁も特に許される 北 山 人
焼香の間随分永かつた 籬 楓
焼香をしてはつきり死を感じさゝ舟
里方も揃ひ焼香始められ 無 限
焼香がすんで寂しさ増ばかり 若 人
焼香の頬に涙の跡が見え 與 詩 夫
頑世ない子が焼香を教われ 突 支 坊

雨戸まで戻り夜遊び智恵が出ず 穂 波
雨戸迄廣告をして損續き 萬よし
(秀逸)焼止まり雨戸が二枚新し 北 山 人
(軸)銭なしと言ふ雨戸へ隠れる 省 二
川柳脚の終點たる東京に入りしは四月
十九日なり。爾來連日詩友に交渉あり寸閑
を得て赤門前の旅宿に還をなす。類吟は一
つを採つて他を略す。集録中甲乙の差甚だ
しきを知らも列舉して比較する益なしと
せず、新人多きを悦ぶ。(四月二十六日)

(一)金津勝太郎(二)穂波(三)花撰寺穂波
又は花撰(四)松江市横濱町六の二(五)明
治四十年拾月二十五日生(但し戸籍にて
は四拾一年二月廿五日)(六)代々鰻料理
屋(自分は水問屋の仕事に従事してゐる)
鰻屋はゆく／＼癒業する氣なるが自分の
家は松江にて元祖なる故癒業を止めて居
る、(七)「日本人借りて来てまで貸して
やり」路題「魚河岸で見る東京の素晴らし
さ」久良岐「電柱は都へ續くなつかしさ」
水府(八)蝶々を結へる女、即ち花柳巷の
女なり、その爲め可成りの金は蕩散せり
それが爲め一時湯兒云はれた頃もある
只今は絶体にそんな事なし(九)まだ残念
乍らなし、自信の句はちよい／＼出来る
が二三目するさぐさ嫌になる(一〇)繪を
描く事(但し洋畫なり)近頃は川柳漫畫を
やつて見るが仲々むつかしい(一一)有り
ます一人、まだ若し(一二)黙つてゐる男
よく喋べる女(是は程度あり)洋装の日本
人、耳かくし(一三)二十四才の頃高等小學
二年生の頃その節の句に「エヂソンも初
めのうちは空相し」店先で本をただ讀む
熱心さ」その後蝶々を結る女に現つて

讀經に焼香順を高うよみ 眠聲
遠縁は別な心で焼香し 花蝶
讀經の初めに喪主は焼香し 同
焼香に男の子ちつまみ過ぎ 豆蔓
焼香に師と總代が遅れ馳せ 同
焼香をせよと番僧眼で知らせ 雅芳
焼香に立つ看護婦をみんな見る 同
焼香の煙に佛包まれる 二南
焼香に足のしびれたまゝを立ち 同
焼香のすむまで小僧叩いてる 同
未亡人ちつこころへて手を合し 同
一番にする焼香の手がふるへ 美幹公
焼香に氣まりが悪う名を呼ばれ 同
焼香のやゝ暫くは目をつむり 吐露樓
焼香は我勝ちと云ふ終ひなり 同
お終ひにする焼香はてれもせず 散柳
焼香に女は襟を一つ突き 同
切腹をしそうなが先づ焼香し 同
焼香を順々にして義理が済む 鎌月
焼香にたく順がある浮世なり 同
自覺せぬ偽焼香の人となり 同
焼香を何も知らない手で済し 同
あきらめの焼香をも身だしなみ 同
孫達も焼香をする賑かさ 同

焼香は後家の若さをおしめ合ひ 柳秀
焼香にしびれたズボンこけかゝ 同
焼香の煙は頭を撫でるよう 同
焼香は衣摺れがして入りかはり 山雨樓
坊さんがする焼香よく煙り 同
さわ付と來て焼香はやつと濟み 同
弟はつかく出て焼香し 同
焼香にかねて聞いた伯父に逢ひ 同
焼香に餘りやつれた母と知る 同
追ひたてるやうに焼香次を呼び 同
焼香の先月添ふたばかりなり 同
焼香の順序に駕屋節をつけ 秋晴
焼香に後がつかへる火葬場 同
焼香に珠數忘れたが少してれ 同
青年團には焼香を帽を脱ぎ 同
焼香へこれも殊勝な顔ばかり 光路
申すまい焼香附へ弱い里 同
焼香へ何か噂がさゝやかれ 同
焼香も長い悼辭に待ち飽ぐみ 同
佳句
焼香の逆様事は髭白し 萬よし
店員も出て焼香はしまいなり 同
一通り焼香がすみしんごする 千鳥
焼香に仙臺平の皺が見ゆ 吐露樓

抜かし餘り作句せず、復活して三年餘、
今では「陽炎」發行に従事してゐる程の熱
心さなり。

（ち）山川白蝶

（一）山川量儀（二）白蝶（三）ナシ（四）大阪
府豊能郡池田町宇字保町二六二（五）明治
三十年六月二日生（六）永い病生活のため
失職して居ります（七）人情味豊かな古川
柳及近作柳樽や川柳塔にある新川柳に共
鳴される句が多く有ります、其の他先輩
の句にも澤山（八）日本髪でも洋髪でもケ
バ／＼しない溫和しいもの、優しみのあ
る女らしい女（九）作る云ふより愛讀の
方ですからまだ（一〇）野球（見るだ
け）登山等外にも趣味は有りましたが病
後は取立て、ありません（一一）有ります
（一二）ブル奴、不調な洋装歸人（一三）
大正十參年の終り頃が始、同十四年の春
本田松花坊氏に教はつてから川柳味を知
り始めました。

（ち）山川草木

（一）山川信（二）草木（三）なし（四）長崎
市片瀬町一丁目一〇（五）明治三十七年一
月二日生（六）さんごに生きたる腰辦（七）

燒香へ長男五才手をひかれ 銀柳
燒香にもれて何處かで生き居り 光路
燒香を濟ませ禮場に寒う立ち 柳秀
燒香を濟まし已れに返つたり 山雨樓
燒香の終りは人を分けて出る 同
燒香が濟むと明るい方へぬけ 同

留學

○ 兎絲子選

留學をさせて母また老けるなり 九柳
留學の窓に詩吟の風があり 鮎美
留學の曰く日本は開けない 案山子
(佳)留學にふさ故郷を思ふ月 溪象
留學はもうバンに飽き肉に飽き のほろ
留學の今更故國の狭う過ぎ 眠聲
(佳)留學生時には故國の流行唄 北山人
留學へ無沙汰を詫びた女文字 翠峯
富士山へ別れを告げて國を立ち 醉夢
留學の窓見上けたり見上けたり 郊村
入學難シカゴへ渡る不肖の子 普天
留學は故國と同じ月を見る 源坊
(佳)歸朝と見よ波止場に父得ッ 千代二
留學の辭合握つたまんな病み 萬よし
地に馴れる頃は歸朝の日が迫り 柳陽

(人)子煩惱さはる燒香に見を也 舟々
(地)燒香はまだかこ汗をふく男 喜一
(天)燒香の多さ生前徳ありて 松水
(軸)燒香に子供同士の手が觸り 紋太
燒香にうちの宗旨で置く 同

小西兎絲子共選
佐々木三福

留學の妻に嬉しい淋しい日 柳一路
(佳)留學の子へ便りの短か過ぎ 小蓬
母親にそむき留學生に惚れ 突支坊
留學を見送る中の許嫁 豆蔓
出る時の誓留學忘れてる 無限
(佳)留學に戀人もなく見送られ 秋晴
留學生女巡查に廊を聞き 町二
母の文ならま留學讀み切らず 松水

以後に

1. ものされた材料の大部分が自慢、見榮、故郷戀しの類であつた爲何さなく窮屈な氣がした。何さかもそつと廣く大きく把捉するわけに行かぬものだらうか。
2. 題の文字を讀み込んで題意を明瞭ならしめるやり方は大概が失敗に終るかさもなくば平凡過ぎる嫌ひの添ふものがある。殊に興へられたリズムの中に事を纏めやうとする川柳だから、もつ

「戦争のある國の夜の街の唄」夢村氏「ここの土間の隅なる蝸牛」五呂八氏其他數限りなくあり(八)途上六割は親しめるタイプ、明るい姿(九)自信らしい自信は創作のその時を去るに伴れて無くなりやす(一〇)テニス、風上け(當地名物の一つ)(一一)なし(一二)喧嘩の相手位のもの?(一三)一ヶ年にもなりますか。

(一四)松丘町二

(一)松岡祐布(二)町二(三)別號無總てに町二を用ふ(四)松江市外川津村橋本、野津類市方(五)明治卅五年六月九日生(六)教師(七)この先を考へてゐる豆の蔓(八)花時の人の足にも午後六時」等々多數あり(八)表情が明るく生きてゐる手と足の美しい女(九)川柳に趣味を覺え作句を始めてから一年四ヶ月、未だ自信の句がありません(一〇)映講、卓球、探偵小説、化學等(一一)無、味氣なき下宿生活(一二)官等學歷等を鼻の先にぶらさけてゐる奴、食物では數の子(一三)大正十五年一月當地の松陽新報及び山陰新聞の新年募集句に應じたのが始め

と語句文字の節約活用が必要だと思ふ
3、近頃の席題廢止論も勿論他にも根據は
あらうが、其みなかみはかうした句が
に決されるからによることも大で
あらふと思ふ。

4、然し蒐められた句数の多いこと、投吟
者の範圍の廣さにはよそこそならす心
から嬉しく思ふた。

三 福 選

海峽の朝を留學デツキに居 鮎 美
御英姿をバリーで拜む御留學 案山子
留學の今更故國狭く見る 眠 聲
留學に支那はほんごに怖いさこ のほろ
留學の兄の寫真がたびく來 茂
留學の歸る途中で骨になり 赤 坊
留學の留守に弟卒業し 一 郎
留學費嫁の道具に數へられ 喜 一
留學は爲替の甘いコツも知り 突支坊
留學を見送る中に許嫁 豆 蔓
留學の歸りを待てば二人なり 若 人
留學に戀人もなく見送られ 秋 晴
留學を命ず生徒に逆もぎり 松 水
留學に便りの内の女文字 翠 峰
開業にドイツ仕込の腕を見せ 醉 夢

留學をしたがる都に夜があり 美髯公
留學を厭れば妻も決めてあり 志 郎
留學は明るい心で土を踏み 郊 村
留學は千ループルを惜げなく 銀 柳
留學の肩書英語で一つ増に 千 鳥
入學雖シカゴへ渡る不肖の兄 菅 天
留學は嬉し悲しい彼女なり 散 柳
留學へ妻は嬉しく淋しがり 柳一路
留學は向ふの風になつて來る 蘆 坊
屋根裏も住めば都の留學生 千代二
留學の辭令詰つたまで病み 萬よし
留學の眼に日本がいつち好し 同
留學生孟子を生んだ國から來 柳 陽
留學の用意會話の本も買ひ 同
(佳)留學はもパンに飽き肉に飽き のほろ
(佳)留學を沙汰止みにした女 花 蝶
(佳)留學の洋服丈けは板につき 町 二
(佳)スイツツルへ來る留學の夏 萬よし
(佳)留學の當座すなはな日 柳 陽
(人)地に慣も頃は歸朝の日が迫り 同
(地)留學の子の便りが短か過ぎ 小 蓬
(天)留學に翼の欲しい悲報來る 美髯公
(軸)留學に洩れて淋し父さなり 三 福



川柳書架

(廿三)

川柳八雲琴

金津穂波編

寛政改革と柳樽の改版

法學博士 岡田朝太郎著

▲柳樽解剖、その當時の風俗人情、川柳のバックをなせるその時代の政治に就て詳しく知るこゝが出来るので川柳研究家に至つては全く至寶である。書架子は曾て川柳書架の(十七)に於て賞讃辭を惜しまなかつたが、その時の本書は上下二冊に分たれた横書きの稿本であつた。そして特別の人達にのみ配布されたものであつたが最近これに幾分の増損をほごし、弘く發賣することになつたのである。

▲川柳書架の(十七)に、本書の主要目次をかくてあるからついて見られたい。

▲昭和二年四月十五日發行。四六版三九八頁。定價貳圓五拾錢。發行所は東京市日本橋區鐵砲町六番地磯部甲陽堂。

▲本書は從來刊行された川柳の研究書の中で最も系統的に著述されたものである。

▲編者はその序文の一節に、次のやうに述べてゐる。「本書の使命は前に申した如く、明治、大正の川柳詩の一部を後世に遺すが、要素にして、又後世の柳人をして明治、大正の川柳を讚美して戴き度く旨目に等しき貧しい自分が此うした異常なる仕事に旅立つたのです」。

▲昭和二年五月一日發行。四六版一六一頁。定價壹圓貳拾錢。松江市横濱町三勞勵美術社發行。

▲革新派の氷原句集に對して傳統派の句集云つた形である。組み方までよく似てゐる。一讀するに編者自身の作句力よりも選句眼の低いことは遺憾であるが斯うした地方的の仕事としてこれ位のものが出来れば先づいゝしなればなるまい。殊に編者は引續いて句集編纂の意圖もあるらしいから長い目で見る必要がありう。

退院と轉居

▲私の入院は柳友の殆んど七分通

りによつて悲觀されてゐたが幸にして黒

枠を破棄して生還した。この生還は全く先輩や友人や醫者や看護婦や附添や其他の人々のたまものだと思つて只管感謝してゐる。五月八日に退院しておもむろに静養してゐる。今日の狀態では病氣に罹る以前よりも、もつとすぐれたからだになりさうな氣がするから御安心を乞ふ。

▲覺鬱の家はロンドンの死によつて一層陰慘な空氣が漲ぎつた。誰も彼も蒼い顔をしてゐるやうに思へてならない。熱が一寸出ても脅やかされる。それがためにほんごの病氣を誘ひ出してゐるやうにさへ思へた。私が退院してからも容易にさうした冷めたい感じが去らない。それがために昨年来、ほつ／＼頭を擡けてゐた宿替熱が急に高くなつた。それで急に引越すことになり、私と霞乃で家探しをはじめたが帯に短し襷に長しでなか／＼にいゝ家が見つからなかつたが、兎に角これなら辛棒が出来ぬこともなからうといふので取りきめたのが

大阪市西成區千本通五丁目七番地

で南北のあいた今よりも狭いが明るい家である。南海線岸の里で下車して西北五丁のまゝ。御來遊を乞ふ。(路耶生)

生活近片

森の都より

安川 久 流 美

樟の樹の家を別れる日が来た。初夏に引越した家も又植物にめぐまれる所である。土堀つゞきの街で、門の内には新緑燃ゆる柿も、男性的な栗の樹がある。私は直ちに栗柿軒と名づけた。柳友の訪れるにもよい目印だと思ふたからである。

柿の葉の新緑窓へ夏を見せ

斯うして森の都を一年足らずで移つて来た私達は、全くさすらひ人である。一粒の子供も一ヶ月半で轉校させることになつた。七ツの子はまた新しい友達をこしらへるであらう。

急にこれ迄の職を辭した私は間もなく新しい住居へ移つて、五月は生活上の革命が二つもつゞいたのである。

例年なら、セルを着ねばならぬ頃であるのに減法寒い日がつゞく、袷の重ね着

に冬の羽織——老人は置炬燵でもほしい位の寒さである。大雪から地震があつて又金澤としては數百年ぶりの大火——今年は莫迦に天災の多い年である。此次は大洪水が襲ふかも知れない——市民は頓だ不安に誘はれてゐるのも強ち神經衰弱にさりつかれてゐるでもあるまい。

引越して日淺くこれも移轉して餘りの經たない光林坊を訪れると曰く、例により頓狂な聲で

『ナニツ、十三日に宿替へした、悪い日だ、佛滅の日や』

こいふた。

『さうか、ナニこの前はさんりんほこいふ日に越したヨ』

私は半然としてゐる。そんな迷信くさいことには氣を置かない。事實悪い日にした所でそんな日めぐりに念を入れて居れない程餘裕をもてない世の中だ。

街の果から果へ移つたのもバスケットを掲げて手帳な旅行してゐる心だ。

きのふの氣分はけふの氣分ではない。武士町とはいへ近所に私の好きな湯がある。清潔で新しい湯だ、稱して『赤目湯』こいふ。疲れた體を、さんぶり湯に浸つて一日の苦を忘れる。

引越して湯の近いのを北叟ゑみ昔は狐狸もあね様に化けたらう？こいふ本多町、湯屋の一軒隣りにタクシーもあつて昔のまゝの土堀に文化の風は正に襲ひつゝある。

私等が孫の顔でも見る頃はこの懐しい百萬石名物の土堀も全くなくなることだらう。

大分さきに東京の川村花菱君が金澤の川柳家を訪れた時、彦三町と長町の土堀つゞきに一寸驚かされた事が當時『川柳詩』にのせてあつた。

市内でも最も土堀つゞきの多いのは彦三、長町それにこの本多町なのである。彦三町は去月廿一日夜の大火に九分通りは烏有に歸したから、今度は新道路が

しかれて塙も板も變るにちがいない。

花菱君が初めて訪ねた北都川柳社——

彦三町の亡き紅法師宅は幸ひ火難をまぬがれたが、去年の夏まで「百萬石」を發行してゐた淺田庄之助君の宅は火元の隣で悉く灰になつた。實にお氣の毒だと思つてゐる。百萬石の殘稿やその他も灰になつたであらう。

目下『いたゞき』を發行してゐる末廣川柳社も近火の方で、經營者の麻叶君が其夜重要書類と共に川柳に關する一切も片づけたといふ。殊勝な心がけさいはねばなるまい。

私の生活近片をかくつもりが大分話を横道へそらしたが、これも川柳の爲め熱心な餘力だと思つて頂きたい。

近頃縣下輪島から「おほさり」が發行され、同じく小松から「やなぎ」が既に三號が重ねてゐる。金澤さいふよりも北陸として、柳壇はなかく亡びない。私はいま金澤の一隅にゐるじつと柳界の雲行きを眺めてゐる。(五月十五日雨の日)

近事片々

萬よし生

◇爺頼むと言はれたら

電車賃から、關東煮一本から、生駒の命日から、内輪者の出獄出迎へ費から、西國巡禮の奉願帳から、紫安會若槻會から、芝古角力の組見から、壽會から、妙な處で幡隨院を決めたがる癖はいつも女房の愚痴で、月末の満面で鼻が付く譯だが、御蔭で身體の健康で、預金を持たねば銀行の破綻に無神經で居られる幸福を持ち得る。

◇川柳を教へて呉れい

さいふ客が可なり多い。萬よし川柳の發表やら、柳人の酒興漫談に刺戟せられて有識無産階級の生活の壓迫から脱けやうとする中心の叫びとも聞かれる聲である。答へて曰く、川柳は纏まるべきものであつて造るべきものではない。百人百種の容貌のやうに、百人百種の生活を表顯す

るのは典型や、規範がある譯でない。あなたの感激した記録を十七字に纏めて下さい、及ばず乍ら愚見を申しませう。問ふもの半年にして一句を作らず。

思へらく、初手から名句を吐いてアツと言はしてやらうと、遂に川柳に縁なき衆生となり終るなり。更に忠告して曰く百句を作して九十九句を捨てよ。客思へらく、百句を作するより一合餘計吞まう。作家たる亦難い哉。長大息久しうす。

◇本當の穿ちさいふこご

は確かな定義がないらしい。大工が削れ工合を試すのに材木に一寸當てる眼や、鑄物師が金物の溶げ工合を見る火箸のやうなものであるとある先輩に教へられたが、まだハツキリさ會得は出来ない。賀川豊彦氏の説に、滑稽さには有る様に有るこごであるといふてゐる。おれは百まで生きた豪語した強健な人が頓死したり舊露國の少將がパンを賣つたり、寝てゐる

ても儲かるらしい見ゆた鈴木が倒れたりこんなチンピラと思ふ少年が名句を吐いたりするのも、皆可能性が實現せられたのみである。眞の穿ちをいふのはこ言う方面ではなからうか。

◇藝の自惚れは行き止り

である。聞いて居るが、川柳のやうな趣味性のものには殊にそれが多いやうである。大峰山へ始めて登るにも、もう頂上だらうと思ふてから遙か向ふに頂上がある。釋尊さへも四十餘年未顯眞實といふてゐる。十ウの名句を得るために、九千九百九十句は上る階段となつても差支ない譯である。

◇先輩には到底追つ付き難い

なき卑下するのは男兒の尤も耻辱とする體度であるが、苦心數十年の先輩の作句詩論を未理解のまゝ時代後れのやうに一蹴し去ることは、より一層研究心のない卑屈な體度である。

◇柳友同志の掲げ足取りは

膝突き合せて、徹宵意見を戦はすならは大抵は氷解すべき問題が多い。彼の主張彼處にあり、我が意見茲にあり、兩立し得る可能性のある場合にも、當つて碎けない結果・疑心暗鬼を生じ、誤傳誤解を産み、遂に柳友をして仇敵も當ならぬ仲に追ひ詰める。柳友同志の意見の戦闘は筆舌共に正面衝突で行きたいものである。

◇川柳は人事詩すれば

人を讀むことが第一義である。人を讀むさいふのは、一見して對手の個性・習慣・習癖、職業、趣味、つまり全人格を觀破することである。人を讀む秘訣は人に惚れるのである。人を愛するのである。惚れた欲目は、アバタも笑顔、人を信用し得るものだけに、人間の眞價は公開せられるのである。

◇神様と畜生との中間を行く

のが人間であつて、言ひ換へる人間は

或る時は神に近い情念を持ち得るし、或る時は畜生に近い妄念にさらはれるのである。煩悶不平の川柳も出来れば、超人悟道の川柳も出来る譯である。

◇人生をエツキスしたものが

川柳であつて、自然をエツキスしたものが俳句である。俳句を演繹すれば森羅万象となり、川柳の演繹すれば人事百般なる。エツキスの價値は、水晶のやうに透き通ることである。ダイヤの如く光ることである。明星の如く輝くことである。黄金の如く響くことである。鋼鐵の如く弾力があることである。香は梅の如く、色は櫻の如く、動けば風の如く座せば山の如きは蓋し川柳の上乗なものであらう。

初對面的情景

川柳脚の蛭子省二氏を迎へ

檜山千代二

大阪かと思へば名古屋、静岡から繪葉書が飛ばされるので、いつかいつか心

待ちした省二氏が東都につかれた翌日、
約束時間(やくそくじかん)を背(そむ)き柳書(りゅうしょ)あさりに出掛けられ
た後(のち)でお會(あ)ひもならず、柳路(りゅうじ)廣瀬(ひろせ)中佐(ちゅうさ)
銅像(どうざう)前(まへ)で別れたその次の日、わざ／＼の
御足(みそく)勞(らう)或(ある)るビルヂングに柳路(りゅうじ)三俱(さんき)に初對(しよたい)
面(めん)、御滯(みどまり)阪中(はんちゅう)の感想(かんさう)各地(こくち)風物(ふうぶつ)の情緒(じゆう)
等(らう)で奏(そう)でる音樂(ぎょく)のやうに拜聽(はいてい)した。その節路(せつろ)
郎主(らうしゅ)幹快(かんかい)方(かた)の二柳子(にりゅうし)氏(し)からの端書(はんしょ)もみせ
られ愁眉(しゆめい)を開き霞乃(よはの)夫人(ふじん)へお喜びの句を
送(おく)つた。

病院(びやういん)の風呂(ふろ)でやせてるなと思ひ
退院(たいえん)の窓(まど)麗(れい)かな空(そら)を見る 同 柳路
退院(たいえん)にだんだん近い皮膚(ひふ)の色 同
氣輕(きけい)爪垢(つまが)をはじつてゐる病人(びやうじん) 同
經度表(けいどひょう)にたんだん晴(は)れた日(ひ)が續(つ)き 同 千代二
煩(わづ)ひげをそる病人(びやうじん)へうららかに 同
塗着(ずさく)で粥(かき)かきまはした夕焼(ゆふやき)がする 同 省二
お粥(かき)くつて鉢(はち)の花(はな)に住(す)み給(たま)へ 同
口髭(くちげ)なつまみ粥(かき)の茶碗(ちawan)が小さ(こ)さ 同

灯(ひ)がついたので時代錯誤(じだいさくご)の繩(ひも)のれんを銘(めい)
をうつ日比谷(ひびや)名物(めいぶつ)「富可川(ふかがわ)」に登(のぼ)り片つ
ぱしから注文(ちゆうもん)する庖刀(ほうとう)の味(あじ)に膝(ひざ)を崩(くず)して
寄せ書(よせが)八十枚(はちまい)北海道(ほくかいどう)から蒲鮮(ふせん)に飛ばした

百年の大計(ひゃくねんのだいけい)に富可川(ふかがわ)の醉(よめ)が出る 千代二
富可川(ふかがわ)の茶飯(ちはん)をくつて見る時計 柳路

小波山人(せいはさんじん)の句(く)に和(な)す

富可川(ふかがわ)の小鉢(せうはち)へ春(はる)の片(かた)便り 省二

數奇屋(たうきや)橋畔(きはん)新樂(しんがく)朝日(あさひ)社(しゃ)の水(みづ)に映(うつ)る美觀(びくわん)を
横(よこ)にして銀座(ぎんざ)をぞろ歩き(あそび)の群(ぐん)に入(はい)つた。

千正屋(せんしや)のオレンヂエードにモーダンボー
イの心(こゝろ)なり十一時半(じゅういちはん)右(みぎ)三左(さんざ)へ電車(でんしゃ)に乗
る。(四月二十四日記)

川柳と聯珠

太田朝陽

近時(きんじ)最も盛(さか)んに流行(りやう)せるは川柳(せんりゅう)と聯珠(れんしゆ)
である。兩者(りやうしや)は昔(むかし)から現今(こんにち)に至(いた)るまで同
歩調(ふてう)で進(すす)んで來(き)て目下(げふ)日本(にっぽん)全國(ぜんこく)大小(だいせう)幾多
の新聞紙上(しんぶんしじやう)に川柳(せんりゅう)欄(らん)と聯珠(れんしゆ)欄(らん)を見(み)つける
に至(いた)つたが、尙(なほ)同好者(どうこうしや)が斯道(はくどう)發展(はつてん)のため
極力(ごくりき)宣傳(せんぷう)せられてゐるのこゝ、専門(せんもん)の雜誌
が表(あらわ)されたのも流行(りやう)の寵兒(てうじ)であるこゝを
知るこゝが出來(で)る。

我等(われら)兩者(りやうしや)の最も相(あ)似(に)したる處(ところ)を示(し)して如
何(いかん)にその興趣(きんそう)深(ふか)きかを研究(けんきゆう)して見(み)たいの

である。

イ、入り易(やす)く而(しか)も奥行(おくぎやう)きの深い點(てん)

ロ、無理(むり)な腦力(のうりき)を使(つか)はない點(てん)

ハ、僅(わずか)の餘暇(よじか)に之(これ)を樂(たの)しみ得(え)る、學(まな)べば學(まな)ぶ
趣味(しゆみ)の深い點(てん)

ニ、相手(あひだ)のない場合(ばあひ)は一人(ひとり)で樂(たの)しめる點(てん)

ホ、辛辣(しんせき)な樂(たの)しみと諷刺(ふうし)のある樂(たの)しみ

ヘ、澤山(たくさん)の文字(もじ)を使(つか)はず澤山(たくさん)の石(いし)を使(つか)は

ずして妙趣(めうしゆ)の表現(ひょうげん)と勝負(しやうぶ)のある點(てん)

ト、同好者(どうこうしや)の人間味(にやうみ)に於(お)いて物(もの)に頓着(とんちやく)なく

泰然(たいぜん)たる點(てん)

チ、歴史的(れきしき)に視(み)て冠句(かんく)よりの川柳(せんりゅう)と五日(ごにち)

並(なら)べよりの聯珠(れんしゆ)

リ、他の趣味(しゆみ)より若々(わくわく)しく擴張(くわさう)こそ宜(よろ)

傳(でん)に餘裕(よじよ)のある點(てん)

其(その)の他に於(お)いても尙多(なほおほ)くの共通點(きうつうてん)を見(み)出す

であらう。

川柳家(せんりゅうか)諸氏(しよし)におかれても各自(各自)好(この)まるゝ

まゝころに従(したが)つて研究(けんきゆう)をされたいものである。

天理教踊つて神の御意に入り
新夫婦散步を日課の一とし
俺一人散歩をするも春であり
ビクニツク妻の疲を下駄に見る
破れ目へ襲った風が細う鳴り

平野偶會 (大阪)

五月七日 松本助六報

同人の二柳子氏が來遊されたので、博久氏
と私で二題作句後、念佛踊で有名な融通念佛
宗の總本山、大念佛寺へ伴立つて参拜いたし
ました(助六)

機械場、蛙

機械場で課長の聲のちさいこと
機械場をこはくみてゐる女連れ
停電を機械場からも知らせに來
機械場の音が手真似を馴れさせる
機械場でどれだけが居る音がする
事務室の時計機械場からも見は
機械場に聲張りあげただけの唄
機械場へかかつてならぬ水を撒き
難魚取りの網に蛙がよつかかり
なんとさう蛙の故郷をなつかしみ
古池を蛙は泳ぎ廻つてゐる
飛びこんで蛙苗代廣く見る
投げつけた石に蛙はこつち向き
咽喉笛を見まおんびきにくたらし

やなぎ會小集 (大阪府)

五月十四日 河村桃哉報
國自慢、親切

外は雨俺が俺がの國自慢
出禁に自慢をこてる大阪城
寄宿舎で非番の夜の國自慢
落ぶれた身に國自慢なんになる
おみやげと共にはめてる國自慢
親切はかゆいところへ手が届き
親切な人さ思へど女氣の
水枕その親切に眼を開き
親切に口先ばかりの儀理の母
同病を見舞ふて呉れる友がくる
親切へ慣れた言葉で禮を言ひ

川柳 松江句會

奈良井 仙坊報

蕪風そよ／＼吹き、初夏の色、いよく濃
くなつて行く五月十日、天神ミドリ喫茶店に
於て本支部の例會を開く、一同眞剣な句作振
りは嬉しかつた。當夜本社二柳子氏より兼題
句を送られた(幹事)

兼題「煙」

互選

たきつけのしめり煙が立つばかり
物干の黒い煙りを氣にしている
風の煙は壁へつきあたり
煙を撒くやうに自動車走るなり
煙突へ當てにもならぬ字が書かれ
喫ふて終るパイプ最後の煙を吹き
煤煙の都に着いた青い顔
居塞店煙りを風が持つて逃げ
出帆の港の空へ煙の色
念佛の中にさびしい煙が舞ひ

猛烈な煙りの中へ消防夫
さやかな煙をゴム靴後にして
煙突の影を越へ煙を越へ
涼み臺隣の煙がはふてゐる
黄昏の街をなめてくやうに煙

席題「息」

互選

決勝點もう一息の走りやう
添睡した母も本當に寝てる息
手術臺見て居る方の息づかひ
新參に息もつがさす用があり
病む母の寢息を聞いてホッとする
息などをかけて道具屋磨く事
拳骨に息をかけ／＼寄つて来る

席題「衰弱」

穂波選

衰弱をして友達を訪れる
衰弱の姿へ妻も案じてる
衰弱はベツトに腕を細うなで
ばうぜんと鏡をにらむ病上り
(人)全快は衰弱の儘戻つて來
(人)衰弱の頭へ太陽強く照り
(地)衰弱をし切った腕にないてゐる
(天)衰弱は飲みたい氣も通て見る
(軸)衰弱の身に眠したい人通り
優等出て衰弱をした身体

第七回 糸屋町句會 (大阪)

五月八日夜 川合舟々報

當夜川柳雜詠社から松郎、眠聲、貼美の三
氏が出席され、作句後松郎氏より、川柳に關

四七

編輯後記

▼入院中であつた主幹路郎氏は、其後メキメキと輕快になり、五月八日に目出度退院されました。退院後も極力静養されてゐます。そして本號の編輯にも従事され、廿二日の堺吟行にも参加されました。今日では最早全快と云つてよい程の元氣になつて居られます。▼別項の通り路郎氏一家は、六月八日に大阪市西成區千本通五丁目七番地へ轉居される事になりました。從つて本社も同所へ移轉する事になりました。故左様御承知下さい。私の「遅日莊留守で三十九錢損」の句も骨董になりました。何れ考證家の手を煩はすことでせう。▼本號の表紙繪は吉田清氏の力作です。大いに味つて下さい。▼半文の氏の「病床獨斷語」は柳界の推移を語るもので、好讀物たるを疑ひません。▼引續き滯京中の姪千省一氏（ます子夫人は既に歸郷）は六月上旬歸郷されるさうです。▼主幹路郎氏は最近發行の週刊朝日夏季特別號へ「川柳漫評調の調」といふ面白く句評を書かれました。是非御購讀をおすゝめいたします。益する點が多いと思ひます。▼本社濱寺支部太田朝陽の主催で五月廿二日の日曜日に堺吟行を試みました。参會者三十名さいふ盛會で中々賑はひました。詳細は次號で發表いたします。▼同人橋本二柳子氏は四月下旬、家族同伴で紀洲湯崎温泉へ。同人庄萬よし夫人ため子さんは五月上旬、淡路方面

へ。東谷閑路氏は金澤方面へ。夫々旅行されました。▼昭和川柳が京都市四谷區寺町六西島方關東川柳聯風事務所より刊行されました。定價一部廿五錢。▼「おはこり」が石川縣輪島町河井一部番地、本堅地川柳社事務所より創刊されました。大連川柳會盟に滿州日日新聞社主催で、六月十二日午後一時より大連市山縣通り、大連海務協會海員集會所に於て、滿州川柳大會が開催されます。盛會を祈ります。▼落各六文錢氏は今回「六文錢」を廢刊と同時に、草詩堂同人をも退かれたさうです。▼同人馬場月鬼氏は今度都合により退社されました。▼德島の内海銀柳氏は最近扁桃腺を患はれて手術されたさうです。速に全快を祈ります。▼片岡仁左衛門一座の片岡愛之助（如柳）氏は、近年川柳に遠ざかつて居られたが、下關で興業中五月十六日、阿彌陀寺町の料亭魚七で腸澀血の爲永眠されました。お悼み申上げます。▼赤塚壽男氏は今度河柳雨吉と改名されました。▼同人三好革郎氏は大阪市北區神山町三三公債社へ。▼同人酒井駒人は神奈川縣中郡茅ヶ崎町東仲町一九・五酒井ヨヨ方へ。▼西原柳雨氏は京都市下高島寺九八五へ。▼安川久流美氏は金澤市外本多町五番丁八の一へ。▼畑田炭車氏は大阪市浪速區惠美須町二丁目一五〇へ。▼田中三平氏は大阪市西區靱中通一丁目一二へ各轉居され、▼魚崎長太郎（眺太郎）氏の住所は今度大阪市港區音羽町三丁目七番地と政稱されました。（松郎生）

川柳雜誌社同人

主幹 麻生路郎

岩崎路 伊藤彦造 原上風 林馬行 橋本二柳 西垣松雨 德田三笑 太田朝陽 龜田花童 横田眠聲 高橋かほ 竹内柳 津田耕水

山口支馬 豐中支馬 東京支馬 築港支馬 城南支馬 西宮支馬 淀川支馬 神戸支馬

萬よし 朝史風 飯山陽 美の作 英豆 松雨 萬よし

井上仙坊 奈良大 矢田葵 黒川馬 柳木洲 安井ひろ 松本助 藤本卯之 藤里藤 駒生蘭 佐々木黙 酒井飯 喜田山 三喜飯 庄好郎 檜山千代

（いろは順）

投稿規定

▼句稿は各題別紙に認め、住所氏名を明記するこゝ。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」を封筒に朱記するこゝ。

▼締切は嚴守されたし。

▼各地會報は清記のこゝ。

▼用紙は半紙又は同型の野紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこゝ。

募 集

第四卷第八號課題

六月十日締切
(各題二十句以内)

▼相 談 篠原 春 雨選
▼漁 師 柳 川 洲 馬選
▼少 年 井上 刀三 共選
喜田 飯山 共選

第四卷第九號課題

七月十日締切
(各題二十句以内)

▼鰯 光 村田 鯛 坊選
▼稻 光 矢田 右大臣選
▼地 圖 小西 鬼孫子 共選
橋本 二柳子 共選

每 號 募 集

▼近作柳傳(卅句以内) 麻生路郎選
▼各地柳實(會報) 塚崎松郎編
▼文章(評論研究吟行漫文)

社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

價 定

一 部 參 拾 錢
六 部 壹 圓 六 拾 錢 (稅 郵)
十二部 參 圓 (共 稅 郵)

廣 告 料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便(二年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指承願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和二年五月廿五日印刷
昭和二年六月一日發行

第四卷第六號
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生 幸 二 郎
發行所 兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地 川柳雜誌社
振替大阪三一五一四番

大阪市港區八條通二丁目十二番地

川柳雜誌社事務所

振替大阪七五〇五〇番

店書攤賣

(大阪) 明文堂 公立社 柳屋 和正堂 三笠屋
(東京) 仲見世 玉森堂 (神戸) 米田 後藤 (金澤) 石井
(函館) 石塚 (廣島) 金星堂 (石川縣小松) マコト屋

讀書子に告ぐ

今のやうにあさから／＼新刊が出るゝ新刊を一々讀破することは容易ではない。たとへ新本を買つてもいよく讀むころになれば、もう古本で至極新しい本が出てゐる。こうなればわざわざ新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新しい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に公立社の棚には斯うした新しい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にまつては、誠にありがたい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちに幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。つまらぬ事のやうであるが實行されたならば決して損の無いことがわからう。

(路耶生)

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南 五 六 二 番

清 酒

母親も白鶴ならこ一つ受け
恩給も近く白鶴樽で据ゑ



灘 津 攝

嘉納合名社會釀



非常に愉快に聴ける

貝印内外

レコード

御家庭の喜びは

このレコードから!!

一枚は一枚づゝ

笑ひが漲ぎる

レコードの花形!!



合資會社 内外蓄音器商會